

504  
287

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15  
m

始





十  
二  
月

あ  
の

か

あ  
の  
い

あ  
の  
い

あ  
の  
い  
あ  
の  
い  
あ  
の  
い





イ  
エ  
ス  
の  
内  
部  
生  
活

加賀川興業社





504-287

## 序

——イエスと魂の會話——

私『イエスよ——あなたが悶えた。人類の缺點と失敗は、また私達の悶えになつて居ります。いつになれば、いやな人種争闘の聲と、階級戦争の叫びが鎮まるのでありませうか？ 救主よ、わたくし達の立場を不憫とはお思ひになりませんか？ 私は悶えて居ります。凡てがアルコホールと梅毒の仕業のやうにも考へられますが、そうではないでせうか？ 罪人の友、悩むものゝ慰め手、どうか、この悲しむ魂に光を與へて下さい』

イエス『おまへは、そんなに、いらだ、しくしてはならない。私を信じ、また神を信じなさい。私の使命は、飽迄罪人の支え柱、貧しきものの友として努



力することにあります。それが神の御心です。神とは救はんとする意志と云ふことです。それを固く信じてあまり悲しまないで居て下さい』

私『それはよく知つて居るのです。然し、その救の手の延びることがあまり遅いちやありませんか？』

イエス『それは心配しないで、私をお信じなさい。見ずして信するものは幸ひです。』

私『みなものは あなたを拜めば救はれると云ふてゐるのは ほんとしてせか？』

イエス『私を拜んではなりません、「父」は私より偉大です。私は偶像ではありません。拜む可きものは父です、神です。私はたゞ「父」の救ひを見て来た儘に知らせるだけです。私は救そのものです。私は愛です。救です。生命

です。眞理です。拜む可きものではなく、生く可きものです。』

私『よくわかりました。ではあなたの如く生きれば善いのですね』

イエス『わたくしの魂の内側に住み込んでくれると善いのです。そうすれば、私もあなたの魂の中に住みます。つまりあなたが私になれば善いのです。私を信するものは 私のする位のことには出来ませう。いや、仕事の上に於ては 私より大きなことが出来ませう。』

私『まア 何と云ふ謙遜な！』

イエス『謙遜ではありません、それほど 私の説く途は安易な道です。だから重荷を負ふてゐるものは 私を途にして私を踏み付けて進むのが最も善いのです。』

私『有難う御座います、何だか あなたが善く理解されて来たやうに思へて



なりません。あなたの博大な愛を伺ひますと、ひとりでに涙が流れて來ます。惡に傾む人の多い世の中に、あなたのやうな人が善くあつたものですね。』

イエス「もう一つ あなたに注意して置きます。私を理解する人達は互に可愛がり合ひをしなさいね、可愛がり合ひをすることによつて、世の中の人が、あなた達が、私の弟子たることを知るのです。この意味がよくわかりましたか?』

私「それではなんですれ……たゞ信仰一點張りで我執を張らないで 愛の中に一つになれと云ふことなのですね』

イエス「そうです、私が天の父に愛せられてゐる如くに あなた達も互に相愛す可きです。それが救であり、生命であり、途であるのです』

私「何と云ふ尊いお言葉でせう。あなたは信仰の神秘を全く愛と云ふ賤しめられた言葉でお示しになるのですね。そんなに信仰と云ふものが單純なものであるとは 私も今日まで氣が付きませんでした。』

イエス「父は愛の神です。愛あるが故に 救はんとする意志をお持ちなのです。救とは愛と云ふことです。愛が救ひなのです。その愛を信ずることを信仰と云ふのです。』

私「ありがたう御座います。よくわかりました。私もその心持で進ませせう。私は日米問題の八釜敷い今日、勞資階級戦争の激しい今日、飽迄もあなたの御精神で進みたく存じます。どうかお導き下さいませ。私はあなたが十字架の途をおとりになつたことも よく理解が出来るやうに思はれます。私は恐れ多いことですが、あなたを踏み付けて進ませていたゞきます。そ



して私もまた 後に来るものに 踏まれませう。アーメン』

一九二四・六・二二、

賀川 豊彦  
バラックにて

# イエスの内部生活 目次

## 第一章 イエスの智慧

第一節 人間としてのイエス……………一

人間の水準に——イエスの解剖——人間的真理

第二節 イエスの智慧……………六

駭かれし智慧——權威ある智慧——聖書の知識——智慧文學——パリサイ文學——自己の  
體驗

第三節 教師としてのイエス……………一六

イエス教ゆゑ何を教へしや——學者の職能



第四節 當時の學者とイエス…………… 二二

イエスの教理——學者とイエス——學者攻撃——學者の陰謀

第五節 預言者としてのイエス…………… 三〇

民衆の豫言者——豫言者としてのイエス——イエスの豫言——終末の問題——父なる神の支配

第六節 イエスの智慧の超越性と有限性…………… 四二

イエスの超人性——有限性のイエス——自己制限——狂人辯——無限ならざるイエス——壊れたる土器

第七節 イエスの智慧の内容…………… 五五

活きたる體驗——父なる神の發見——真理のイエス——我は眞理なり——救の發見——聖靈の經驗——イエスと聖靈——人間としての神の經驗

第八節 イエスの表現と神の表現としてのイエス…………… 六六

イエスの表現——詩形の發表——簡単な發表——譬喩的發見——神の表現としてのイエス

## 第二章 イエスの讀書

第一節 讀書家イエス…………… 七一

未だ讀まざるか——眞の讀書法——心核に觸れよ——舊約の價值

第二節 舊約の聖書とイエス…………… 七八

舊約の引照——マカ傳に於ける舊約とイエスの言葉——マタイ傳に現れたるイエスの聖書の引照——ヨハネ傳に於けるイエスの聖書の引照——ルカ傳のイエスの聖書の引照

第三節 自己の發見…………… 八六



イエスの發見——メシヤの出現——受難のメシヤ——二種のメシヤ——メシヤの行動——  
マタイ傳に現れたる聖書のメシヤ觀——ヨハネ傳に現れたる聖書のメシヤ觀——國民の自  
覺

第四節 神の發見……………九八

神の發見——眞の文學

第五節 新社會の發見……………一〇一

イエスと申命記——中間道德——十戒の一括

第六節 救の力の發見……………一〇七

救の法則の發見——神の血清注射

### 第三章 イエスの感情

第一節 イエスの悲哀……………一一一

感情第一——生命藝術——暗影のイエス——曲れる世

第二節 イエスの寂莫……………一一五

イエスの孤獨——妥協を排す——イエス泣く——悲劇の出生

第三節 イエスの喜悅……………一二二

わが喜悅——生命の喜悅——喜悅の道

第四節 眞面目なるイエス……………一二六

厳しく戒しむ——人間性の醜さ——イエスの叱責——嚴格なるイエス

第五節 熱情のイエス、冷靜のイエス……………一三二

熱情の炎——平靜のイエス——恐れなきイエス——イエスの諧謔



第六節 愛の人イエス……………一四〇

六

情あるイエス——罪人に對して——謙遜なるイエス——小兒を尊ぶ——愛の人イエス

第七節 イエスの美的感情と宗教的感情……………一五一

建築の美——自然の美——動的信仰——靜的信仰——人間殿堂

## 第四章 イエスの意志

第一節 イエスの行動……………一五七

平凡なる生活——特異なる點——一種の力——好箇のコントラスト

第二節 イエスの能力……………一六六

異常の能力——異常の現るゝ時——イエスの奇蹟——奇蹟の肯定

第三節 イエスの事業と労働……………一七四

自己の有限——イエスの事業——宗教の本質

第四節 生きんとする意思……………一八一

生命の袋小路——拒否の道——内質的拒否——永生の問題

第五節 神の如くならんとする意志……………一八九

成長——競争——淘汰——更改——忍從——神の忍從

第六節 求めんとする意志と勝たんとする意志……………一九七

伸上らんとする意思——勝たんとする意思——人に奉仕せんとする意思——優越——優越

性の要求

第七節 救はんとする意志……………二〇四

罪の赦し——再生の力——心の若返り



## 第五章 イエスの性格

第一節 イエスの悪評……………二二一

亂暴者狂人——鬼に憑れし者——イエスの辯明

第二節 イエスの善評……………二二一

活ける神の子——學者等の反感——敵の善評

第三節 キリストとしてのイエス……………二二三

ヨハネの斷言——弟子の告白——基督の自白

第四節 二種の人の子……………二二九

權威ある人の子——革命家として——基督評定——イエスの啓蒙——基督肯定——人の子  
疑義——受難の自覺

第五節 俗人の友イエス……………二四一

眞實の人——眞劍の人——傳統の破壊者——弱者の友

第六節 内觀のイエス……………二五〇

靈の王國——眞の宗教生活——怖るゝ勿れ

第七節 靈の征服……………二五六

勿殺の書替——色情の廓清——偽の證を立つるな——盜人なき社會——食る勿れ——宗教  
と科學——生命至上主義

第八節 イエスの人間愛……………二六七

新生命道德——愛からの出發——體驗の宗教——天よりの化身者

第九節 父と子と聖靈……………二七六

三位一體說——壞れた土器——靈の征服者——受肉者イエス



第一章 イエスの智慧



智慧は智慧の子にさとしとせらる。

——マタイ傳十一章十九節——

## 第一章 イエスの智慧

### 第一節 人間としてのイエス

人間の  
水準に

イエスを目するに、我等の近づき難い神とする爲め、人々は温き感  
じをもつて之に接する事が出来ないのだ。イエスを我等と同じ水準に  
置いて——即ち人間として——その智、情、意の各方面を見るならば、  
イエスは必ずしも最も温き感じをもつて、我等の前に迫り来るであらう。

然るに多くの基督教徒は、イエスを人間の水準に引下げて来る事を以て、一の胃潰  
の如く考へる。彼等はイエスの十字架と、復活のみを説いて、その他の人間的部分を



顧みない。その爲めに、イエスの教は、頗る理窟つばいものとなり了るのである。

イエスの教は、鮮血のほとぼり出づるやうな活々としたものである。イエスを肉體の無い神とする場合には、此の人間味の豊かな、温い部分が消え去つて了ふ。

十九世紀に進化論の旺んに唱道された時、基督教といへば一種の迷信として見られたのも、畢竟、斯うしたイエスの見方——非人間的見方——をしてゐたからである。

彼のニーチエも『基督教ほど廢頹的の罪人を集めた處はない』と喝破し、更に『今の基督教は骨拔である、生命がない』と罵つてゐる。『絶對の神とか、抽象的の神とか、ソナ抽象的、字引にしかないやうな事を信じてゐる者に何の生命があらう』とさへ言つてゐる。今日尙イエスを神としてのみ見て、人間として見ない一部基督教徒は、此のニーチエの言葉に反省する處がなければならぬ。

### イエスの解剖

イエスの研究は科學的でありたい。従つてイエスは雲烟模糊たる如きものでなく、實驗室に於て、科學のメスに依つて解剖し得るイエス

でなければならぬ。従て我等のイエスに對する信仰は、ニーチエの評する如き生命拔きのものではない。永生の保證者、生命宗教の把持者としてのイエスである。

イエスはニーチエの言つて居る事を既に千九百年前に於て言つてゐるので、只だ後世の基督教徒が、イエスを餘りに尊敬し過ぎて、之を神とした爲め、イエスのその生命宗教が久しく覆はれて今日に及んだのであつた。

今日までの基督教史は、無駄な頁で満ちてゐる。凡てが徒勞であり、繁錯であつた。イエスは之等の無智な人間が假想する如き、雲の上のイエスではない、突かば鮮血の逆り出るイエスである。人間イエス以外にイエスは存在しない。我等は「人間イエス」を十分に研究しなければならぬ。

或人は私が地上の會堂を嘲り、「精神會堂」を高調するのを嘲笑する。又私が宗教家である一方に於て、勞働運動に鞅掌するのを矛盾だと非難する。併し社會改造の理想としても、目的としても、動機としても、手段としても、イエス以外に、範疇とする



に足る対象はない。共産主義でもその終局の目的は人間を作る事にあるが、その理想の人を誰に求むべきかといふと、夫れはイエス以外には求められない。又社會改造の手段は愛に依る外はないが、イエスほど愛に徹底した人は他に求める事が出来ない。又その動機にしても、世の中の清く、高き心持から出發しなければならぬが、イエスの山上垂訓の如き、純潔な道徳的な動機から出發する事が何よりも必要である。凡べてはイエスから出發すべきである。私が労働運動をなすのも此意味に外ならない。

人間的
眞理

然らば、イエスの智識は如何。イエスは天文學を知れりや、物理學を知れりや、又何等か特段なる科學的方面の貢獻をなせりや、と問はば、我等は『ノー』と答へるより外はない。

大正十二年末、私がアインスタインと會つた時、談偶々ラテナウ（獨逸前外相、大正十一年春暗殺さる）に及んだ。アインスタインは、ラテナウが兇刃に斃れた時、堂々なる弔辭を書いた人だが、彼がラテナウの學說を稱揚した後『人間的眞理は必ずし

も纏らなくとも善い。斷片で善い』と言つた。人も知る如く、アインスタインの相對性原理は、數理的科學から割出された最も組織立つた法則であるが、そのアインスタンは、人間的眞理に對しても、十分の理解を持つてゐたのである。物理科學の眞理と人間的眞理といふものを混同しない點は敬服に値ひする。

イエスより學ぶ所のものが、多く格言、譬諭の如き斷片的のもので、物足りないと感じる人は、須らく先づ此のアインスタインの言を味ふべきである。

眞理は之を分類して（一）人間の内側に働く人間的眞理と、（二）外、宇宙を組立つる物理化學的眞理の二とする事が出来る。美學・哲學・倫理學・經濟學・宗教學は主として前者に屬するものである。イエスの智識は前者に屬する。彼は電氣や瓦斯に關する智識を持合はさない。宇宙物理學の方面については深くは知らなかつた。併し夫れはイエスとして決して恥辱でも何でもない。

最近、哲學の見方が變化して、宇宙物理學にしても、人間的眞理を離れては存在し



ない事が確めらるゝに至つた。米國のヂエームスの如き『人間的眞理が、宇宙物理學を生む』と唱道し、コーエンも亦『宇宙物理的智識は人間的智識の生産である』と言つて居る。即ち人間的眞理が、凡てのものゝ中に存在するのである。イエスが人間的眞理を持つてゐた事は、最も尊いものといはねばならぬ。我等はたつぷりと盛られたイエスの人間的眞理について學ぼう。

### 第二節 イエスの智慧

驚かれし智慧

然らばイエスの智慧は如何。イエスの智慧は人々をして驚駭せしめたのであつた。

彼等カペナウムに至る。イエス即安息日に會堂に入て教を爲しに人々その教に駭き合り蓋學者の如ならず權威を有る者の如く教へたまへば也。(マカ傳一章廿二節)

衆人みな驚き相問て曰けるは是何事ぞや是いかなる新しき教ぞや汚たる鬼さへ權威をもて命じければ從へり。是に於てイエスの名聲徧くガリラヤの四方に播りぬ。(マカ傳一章廿七節)

祭司長・學者ら之を聞き、如何にしてかイエスを亡さんと謀る、それは群衆みな其の教に驚きたれば、彼を懼れしなり。(マカ傳十一章十八節)

イエスの教は、學者の如くならず、荒削りな人間眞理そのまゝであつた。

今日の所謂學者の言ふ事と、労働者の言ふ處の理論の間には大きな懸隔があるが、寧ろ後者の荒削りな理論の方に、眞理を見出すものである。學者、就中御用學者——在來の組織を其儘に保存せんとするもの——は何の役にも立たない。

ヘーゲルは、極端な唯理論的な歴史の見方をした學者だが、フレデリック一世を以て靈の權化なりとし、ホーヘンツォルレン王家の權威は神の權威そのものだとして主張し、以て政治哲學とプロシヤの國體及歴史とを混同した。シヨーペンハウヘルは人間性の立場から此のヘーゲルの學説を論駁し『先づ人間自身を我等に恢復せよ、人間を忘れて歴史、國體のみを言ふ勿れ』と主張したのであつた。



當時ユダヤの學者達は、此のショーペンハウエルの心持を持合さなかつた。彼等は只だモーセの律法にのみ心酔し、人あつての律法たる事を忘れて、律法の爲めに人あはる如くに教へてゐた。之に對しイエスは律法のための人を説かず、人を基礎として律法を説いたので、人々は『之れ何事ぞや、如何なる新教ぞや』と驚いたのである。  
新しき教

時にその會堂に、穢れし靈に憑かれたる人あり、叫びて言ふ、「ナザレのイエスよ、我らは汝と何の關係あらんや、汝は我らを亡さんとて來給ふ。われは汝の誰なるを知る、神の聖者なり」イエス禁めて言ひ給ひ、「黙せ、その人を出てよ」穢れし靈、その人を痙攣けさせ、大聲をあげて出づ。人々みな驚き相問ひて言ふ「これ何事ぞ、權威ある新しき教なるかな、穢れし靈すら命ずれば従ふ」(マカ傳一章七節) 斯かる人を見し事なし

我なんぢに告おきて床を取、なんぢの家に歸れと曰ければその人たゞちに起て床をさり衆人の前にいづ衆人みな駭き神を崇めて曰けるは我侪いまだ斯の如くを見しことなし。(マカ傳二章十二節)  
未だ此人の如く言ひし人あらず

權威ある智慧

而して下役ども、祭司長・パリサイ人らの許に歸りたれば、彼ら問ふ「なに故かれを曳き來らぬか」下役ども答ふ「この人の語るところと語りし人は未だなし」(ヨハネ傳七章四十六節)  
イエスは又權威ある智慧を以て教えたが、その權威のあつた所以は(一)人間以上の力を以て話した事(二)體驗から出た事の二に存する。尤もイエスの教へは、體系をなしたものでなく、斷片的のものであるが、夫れが決して權威を損ふものではなかつた。

論語を読む人は、その語句が斷片的だからと言つてつまらぬとするだらうか。きれはくしの格言でも、味はへば、味ふほど深味のあることを知る。之れ蓋し、孔子の如き人の純潔な良心から出たものだからである。母の言葉が小兒に權威のあるのも、母の光が權威を伴ふからである、人間的眞理は、必ずしも統一されなくても善い。(マカ傳一章二三節、一章二七節、二章一〇節、六章七節、二章二八、二九節参照)

イエスは生長が早かつた。彼は十二才の時、既にエルサレムのミツドラシユ(經典



研究所) に行つて、學者等の講義を聴いて討論し學者を駭かせた。(當時ユダヤでは十  
二才以上の青年を「律法の子」と呼んだ。)

### 幼少兒のイエスの智慧

その子や、成長し精心強健に智慧みち神の恩寵その上に臨れり。(ルカ傳二章四〇節)  
聞くものみな其智慧と其應對とを奇させり。(ルカ傳二章四七節)

イエス智慧も齢もいやまさります。神と人に愛せられたり。(ルカ傳二章五三節)

或人は十二才のイエスが右の如き大人びた事を言へる筈はないといふが、今日の早  
教育や、自動教育の方から考へて決して信じられぬ事ではない。小原國芳氏の經驗に  
よれば、尋常小學四年の生徒に學科及教師を随意撰擇聽講せしめた處、生徒等は大學  
生の如き態度で熱心に聽講し、成績頗る佳良で、生徒は自ら大學生を以て任じてゐた  
といふが、早教育を施せば、尋常四年にして幾何、代數をも學ばせ得る事は、既に定  
説のある處である。

ルーテルの友人で宗教革命の中心人物たりしメランヒトンが、十四才の時に博士  
となり、希臘、ヘブライ、ラテンの各國語に通じてゐたなどの事實から考へれば、イ  
エスが十二才にしてミツドラシユ學校で討論した事位は、毫も不思議ではない。  
壯年になるに及んでイエスは愈々智慧の優つた人となつた。人々はその底知れぬ智  
慧に驚きの目を瞠つた。

### 壯年時のイエスの智慧

安息日に及ければ會堂にて教をはじむ。衆人これを聞て奇み曰けるは如何して此人に斯の如き智あるか  
誰より此智慧を授られて如斯ふしぎなるわざをも其手より行か。(マカ傳六章二節)



イエスは聖書を熟讀翫味し、殆んど暗誦してゐた。現にマカ傳丈け  
でも彼は三十七箇所も聖書を引照してゐるのである。殊にイザヤ書、  
詩篇の如きは全くイエスのものとなつてゐた。イエスが如何に聖書に  
通曉せるかは左の八箇所の引照を見ても判明しやう。



- 1 イエス答けるはダビデ及び從に在し者の乏くして飢し時行したる事を未だ讀ざる乎、(マカ傳二章二五節)
- 2 イエス言給ふ「なんぢらの誤れるは、聖書をも神の能力をも知らぬ故ならずや。」(マカ傳二章二四節)
- 3 なんぢら聖書に永生ありと意て之を探索、この聖書は我について證する者なり。(ヨハネ傳五章三九節)
- 4 聖書にキリストはダビデの裔にてダビデの住し郷ベテレヘムより出んと録したるに非ずやと曰。(ヨハネ傳七章四二節)
- 5 また汝らの律法に、二人の證は眞なりと録されたり、我みづから己につきて證をなし、我を遣し給ひし父も我につきて證をなし給ふ。(ヨハネ傳八章一七節)
- 6 ユヤダ人こたふ「なんぢを石にて撃つは善きわざの故ならじ、瀆言の故にして汝人なるに己を神とする故なり」イエス答へ給ふ「なんぢらの律法を「われ言ふ、汝らは神なり」と録されたるに非ずや。」(ヨハネ傳一〇章三五節)
- 7 聖書に「我ともにパンを食ふ者われに向ひて踵を擧げたり」と云へることは、必ず成就すべきなり。今その事の成らぬ前に之を汝らに告ぐ、事の成らん時わが夫なるを汝らの信ぜんためなり。(ヨハネ傳一三章十八節)
- 8 我かれらと偕にをる間、われに賜ひたる汝の御名の中に彼らを守り、かつ保護したり。其のうち一人だ

に亡びず、ただ亡の子のみ亡びたり、聖書の成就せん爲なり。(ヨハネ傳一七章一二節)

詩篇の如きは、宛ら自分のものゝ如くに消化してゐた。(第二章「イエスの讀書」参照)

此外イエスは村の學校にある書籍は凡て讀破したらしい。イエスの一舉一動は、凡て古きメシヤ文學から出てゐる。彼はメシヤに關する預言に當てはめるやうに行動してゐた。そして此の傾向は、彼が年を重ねると共にすこぶる顯著となつて行くのであつた。



イエスの智慧の泉は聖書の外に智慧文學より得たものをも擧げねばならない。

智慧文學といふのは舊約聖書が出来て後、新約聖書の出来る迄の間約三百年の中にもなされた種々の哲學的文献を言ふのである。就中シラツクの子のイエスの書いた傳道書(ローマ天主教會の聖書には此種の七つの文献を舊約聖書の末尾にのせられてある)は、イエスの熟讀したものと思はれる。といふのは、イエスが



言つた言葉使で、此書の中から引抜いたものが少くないからである。貧しき者は幸なり。惱める者は幸なり……幸なり幸なりの文句の口調も實は此の傳道書の口調であつた。此外當時の智慧文學は、一種の實行的方面の倫理哲學を記したもので、イエスは之を熟讀した結果、その格言が折に觸れて口を衝いて出るのであつた。

イエスはまた其當時世上で流行した格言を自由に用ゐた。(拙著「イエス傳の教え方」参照) 労働者の中には面白い格言を作るものが少くない。労働してゐると真理の角度に出會するのである。イエスは大工として此の經驗を持つたものであらう。

パ リ サ	イ エ ス
-------------	-------------

又パリサイ派の文學から得たものも少くない、イエスの社會倫理の基礎となつたものは全く夫れであつた。北方ガラリヤのパリサイ派は文學に秀で、殊に十二の父長書中にあるガド書(拙著「聖書社會學」参照)にはイエスの山上の教訓の思想が仄見ゆるのである。

イエスは決して無學ではなかつた。當時の文學書は大に讀んだものに違ひない。當

聖の書籍は羊の毛皮やナイルの流域で産するパピラスの紙の上に几帳面に、記されたもので、原料を買い入ることが非常に高價なるため或るものは前に記された文字を消して、その上に二色にも三色にも記されてゐるものさへあつた。今日に於てその上の方を消して下の文學を拾讀し、聖書の新しき發見をする場合が少くない。

イエスは貧家に生れた爲め之を購讀する事は出来なかつたらうが、村の禮拜所にあつた書物を借覽したものと思はれる。

イエスは又非稅主義者——一名熱心黨から啓發される處があつた、イエスの使用した格言にヨシファスが記してゐる熱心黨の格言がある。熱心黨は我國の伊勢の神風連の如きものである、ローマが二回の國勢調査の結果に基き、大國家として最初の徵稅をなしたに對し反抗して立つたもので、それが嵩じて遂に一の黨派を構成したものである。(ルカ傳六章十六節に「ヤログと呼ばるゝ熱心黨」とあるのは此黨員の事である)

熱心黨と呼ばるゝ、レモン



自己の  
體驗

斯く言へばとてイエスの智慧は聖書、智慧文學、パリサイ派文學、非稅主義者からの借物のみで出來てゐるやうに誤解してならない。

イエスの教訓の權威のあつたのは、之等の智識を自己の中に合せて衣とし、自己の體驗を之に加へて教へた點にあつた。即ちイエスの言葉に従へば聖靈の力に依るのであつた。

近代人は聖靈を以て人間的でないとし、之を嫌忌し、之を除去しやうとするが、聖靈を除いては、イエスの智慧を論づる事は、不可能である。(拙著イエスと自然の暗示「イエスと聖靈」の章参照)

第三節 教師としてのイエス

イエスは最初、教師として世に現はれたのであつた。彼は會堂に、屋内に、海邊に屢々人々を教へた。聖書に「イエス教ゆ」といふ文字が頗る多く散見するのである。

イエス教ゆ

- 會堂にて教ゆ……………マカ傳一章二二節
- 新しき教に驚く……………マカ傳一章二七節
- 諸會堂にて教ゆ……………マカ傳一章三九節
- 家内にて教ゆ……………マカ傳二章二節
- 海邊にて教ゆ……………マカ傳四章一節
- 遂に諸村を廻り教ゆ……………マカ傳六章六節
- 許多のことを教へ始む……………マカ傳六章三四節
- 弟子に教ゆ(十字架)……………マカ傳九章三一節
- 恒の如く教ゆ(ペリヤ)……………マカ傳一〇章一節
- エルサレムにて人々その教に驚く……………マカ傳一一章一八節
- 同二二章一四節、一二章三五節、一二章三八節
- 日々神殿にて教ゆ……………マカ傳一四章四九節

而もイエスは懇切な教師で、對手が了解出來ねば、了解するまで、懇ろに解説する



のが常であつた。

### 解説するイエス

斯のごとき数多の譬をもて人々の聴きうる方に随ひて御言を語り、譬ならでは語り給はず、弟子たちには、人なき時に凡ての事を釋き給へり。(マカ傳四章卅四、五節)

故にイエスの此の懇切な教へ方には敵ですら心服した。彼は寔に不偏不黨誠實の教師であつた。

### 不偏誠實の教師

その者ども來りて言ふ「師よ、我らは知る、汝は眞にして誰をも懼りたまふ事なし、人の外貌を見ず眞をもて神の道を教へ給へばなり」。(マカ傳十二章十四節)

何き教

へしや

イエスが何を教へたかについては面白い研究が出来る。聖書には約四十六のイエスの奇蹟が載せられてあるが、此の奇蹟を行ふ人たる一面に於て、イエスは又善き教師であつた。當時の先生といへば主として舊約聖書を教へた人である。

### 舊約聖書は之を大別し

- 一 律法
- 二 預言書、歴史書
- 三 詩雜書

の三とする事が出来るが、就中、當時のユダヤの最も重要視したのは、律法を記した創世紀、出埃及記、利未記、民數紀略、申命記の五書であつた。

ユダヤ人は、彼等が律法を遵守せざりし爲め、奴隸状態に陥つたものと信じてゐた。彼等は紀元前五八六年に奴隸としてバビロンに行つたが、彼等は再び故國に歸つたら、十分に律法を研究して再び奴隸とならぬやうに心掛けやうと誓つた。エズラの如きが熱心に此事を説いた。そのために、ユダヤの村々には、必ず會堂が建てられて律法を教えた。ガリラヤには二百四の村があつたがその何れの村にも小さい禮拜所が設けられて、之を「律法の家」又は「聖書を教える家」と稱へてゐた。只だエルサレム丈けには神殿があつて、その中には高級な律法解説の學校ミドラッシュユの家があつ



た。此處には各村から選抜された優等生が入學して聖書を研究するのであつた。而も之等の學校や禮拜所に於て、彼等の研究する處のものは甚だやゝこしいものであつた。

當時の學者の任務は之を大別して左の三つとする事が出来た。

學者の 職能
-----------

- (一) 律法の學理的發展を圖ること
- (二) 律法を民衆に教えること
- (三) 律法の實際的運用

學者は、パリサイ宗とは異つてゐた。パリサイ宗の或人は學者であつたが、それは少數であつた。パリサイ宗は町人の間にもあつた。學者の任務は只だ律法の解釋をするばかりでなく習慣法 (Haluskah) 及びハカダ (Haggadah) をも教へるのであつた。習慣法といふのは、例へば舊約の申命記や利未記にある如き舊き習慣——食物の物忌み、お産時の物忌み、出征の時の物忌みなどの法則である。學者の第二次の仕事は之に註釋を加へる事であつた。

又ハガダといふものは、聖書にもない傳説で、例へば創造の時、安息日の前夜、黄昏の間に十のものが作られたと信じた事などが夫れである。即ち(一)コラがモーセに反抗した報ひで土地が地震のために裂けた時、その隙間に吸込まれたといふ淵(二)ミリアムの井戸、(三)バラムがモーセの軍を欺いた時に口を利いたといふ驢馬、(四)虹、(五)荒野のマナ、(六)モーセの杖、(七)石糞を出すシャミル虫、(八)アルハベット、(九)石に書かれた律法の字、(十)律法の石碑の創造せられた事が夫れである。

彼等は斯うした荒唐無稽の事實を、傳説的に考へ、そして之が集積して今日「タルムッド」(Talmud)といふものが出来て居る。尨大な此書の大部分は今日に於ては全く無價値のものであるが、當時の人々は之をサモ役に立つものゝ如くに考へて熱心に研究したのであつた。此の無用の傳説や習慣に通曉してゐるものが即ち學者であつた。

併し手は如何にして洗ふべきや、安息日は如何に守るべきやを知つてゐたとて、之等の學者が生命的眞理に觸れる筈はない。之れが妄をひらく爲め猛然突撃して行つた



のがわがイエスである。

### 第四節 當時の學者とイエス

イエスの教理

イエスが始めて彼等の前に現れた時、學者達は驚愕した。何となればイエスの言ふ處は學者の如くならずして、而も權威者の如き教へ方であつたからである。イエスは今日の學者に向つても、その權威をもつてゐる。今日の聖書學者には舊約にある神(エロイム)といふ言葉一字を研究して博士となつてゐる者もある。そう云ふ人に向つて、イエスの生命宗教は、舊約の一文の研究が成つても、我等の救ひにはならない事を教へる。又生命の眞理を教へず在來の慣習を守る事にのみ吸々としてゐた當時の學者の前に、イエスが新しき體驗の宗教を教えたのは間に棲息してゐた魑魅魍魎の前に太陽が出現したやうなものだつた。

學者の如くならず

斯て彼らカペナウムに到る。イエス直ちに安息日に會堂にいりて教へ給ふ。人々その教に驚きあへり。それは學者の如くならず、權威ある者のごとく教へ給ふゆゑなり。(マカ傳第一章二十二節)

學者とイエス

かくて、イエスの教へが屢々彼等學者の耳に入るに伴ふて、彼等はイエスに對して反對するやうになつた。その第一はイエスが罪を赦すといふ事に對してあつた。

汝の罪赦されたり

イエス舟に登りたりて故郷に至れば中瘋にて床に臥たる者を入々昇來れり。イエス彼等が信るを見て中瘋の者に曰けるは子よ心安かれ爾の罪赦れたり、ある學者たち心の中に言けるは此人は褻瀆を言へり、イエスその意を知て曰けるは爾曹いかなれば心に惡を懷ふや、爾の罪赦されたりと言と起て歩めと言と執が易き、それ人の子地にて罪を赦すの權あることを爾曹に知せんとて遂に中瘋の者に起て床をとり家に歸れと曰ければ起て其家に歸りぬ。(マタイ傳九章二一八節)

その二はイエスが俗人と交り酒を呑み娼婦と語る事に對してあつた。  
學者イエスが罪人の友なるを難す



此より進往マタイと名くる人の税關に坐し居けるを見て我に従と曰ければ起て従へり。イエス彼が家に食するとき税吏罪ある人おほく来てイエス及其の弟子と偕に坐しければ、パリサイ人を見て其弟子に曰けるは爾曹の師は何故税吏や罪ある人と偕に食する乎。イエス聞て彼等に曰けるは壯健なる者は醫者の助を需す、唯病ある者之を需む、われ矜恤を欲て祭祀を不欲といふ此は如何なる意か往て學べし。わが来るは義人を招くために非ず、罪ある人を招きて悔改せんが爲なり。(マタイ傳九章九—十三節)

かくしてイエスに對する學者の反對攻撃の聲が次第に昂るや、エルサレムからイエス看視のため新に學者が派遣された。

### 學者達イエスを監視す

パリサイ人と或る學者らとエルサレムより來りてイエスの許に集る。而して、その弟子たちの中に、潔からぬ手、即ち洗はぬ手にて食事する者のあるを見たり。(マカ傳第七章一節)

右は洗手、食事、物忌み、禮典の規則に對するイエスの違法を責むる準備のためであつた。素よりイエスはそれを遵守する筈はなく益々之を破つた。茲に於て學者はイエスを亡きものとなす事に定めた。

### イエス學者達に殺さるゝ事を預言す

また人の子の必ず多くの苦難をうけ長老祭司の長學者どもに棄られ且殺されて三日の後に甦ること

を彼等に示し始めたまへり、明に之を示し給しかばペテロ、イエスを援て諫んとせしにイエス回顧その弟子を見てペテロを戒め曰けるはサタンよ我後に退け、爾は神の情を思はず反て人の情を思ふ。(マカ傳八章三一—三三節)

### エリヤは先に來るといふ學者の説を訂正す

イエスに問ひて言ふ「學者たちは、何故エリヤまづ來るべしと言ふか」イエス言ひ給ふ「實にエリヤ先づ來りて、萬の事をあらたむ。然らば人の子につき多くの苦難を受け、かつ蔑せらるる事の錄されたるは何ぞや。されど我なんぢらに告ぐ、エリヤは既に來れり、然るに彼に就きて錄されたる如く、人々心のままに之を待へり」(マカ傳九章十一節)

### 學者イエスの弟子と論ず

イエス弟子等の所にきたり、多くの人々の彼等の環圍ると學者たちの彼等と論じをりしを見たり。(マカ傳九章十四節)



そしてイエスがエルサレムに入城した時に祭司等が跋扈し、商人が神殿を穢すを見繩鞭を以て之を追ふや、學者等はイエスに向つてその宮潔に反對するのみならず、その理由を詰問した。(マカ傳第九章第十四節)

學者及び祭司長イエスの宮潔めに反對す

祭司長・學者ら之を聞き、如何にしてかイエスを亡さんと謀る、それは群衆みな其の教に驚きたれば、彼を懼れしなり。(マカ傳第十一章十八節)

學者祭司長イエスの宮潔めの理由をきく

イエス宮の内を歩み給ふ時、祭司長、學者、長老たち御許に來りて「何の權威をもて此等の事をなすか。誰か之等の事をなすべき權威を授けしか」といふ。イエス言ひ給ふ「われ一言汝等に問はん。ヨハネの、バプテスマは天よりか人よりか」と言ふ。イエス言ひ給ふ「われも何の權威をもて此等の事をなすか、汝らに告げじ(マコ傳第十一章廿八—三十三節)」

又イエスは學者達がダビデの裔キリストと言ふことに付てもに猛烈に反對した。

イエス宮にて教ふるとき、答へて言ひ給ふ「なにゆえ學者らはキリストをダビデの子と言ふか、ダビ

デ聖靈に感じて自らいへり、「主わが主に言ひ給ふ、我なんちの敵を汝の下に置くまでは、我が右に座せよ」とダビデ自ら彼を主と言ふ、さればいかでその子ならんや。(マカ傳第十二章三十五節)

學者等はイエスに對し律法につき質問したが、イエスは律法の立派な部分は十分に之を熟知してゐたので立所に之に答へた。人々は只だ驚く許りであつた。

學者イエスに律法につき質問す

學者の一人かれらの論じをるを聞き、イエスの善く答へ給ひたるを知り、進み出でて問ふ「すべての誠命のうち何が第一なる」イエス答へたまふ「第一は是なり、「イスラエルよ聽け、主なる我らの神は唯一の主なり」なんち心を盡し、精神を盡し、思を盡し、力を盡して主なる汝の神を愛すべし、第二は是なり「おのれの如く汝の隣を愛すべし」此二つより大なる誠命はなし」(マカ傳十二章二八節)

學	攻
者	擊

イエスは決して學者的論法を知つてゐるのではなかつた。當時最も優れた學派としては、ヒレル派(自由派)シヤムマイ派(保守派)の二つがあつたが、イエスはその何れにも關係がなかつた。併しイエスは



人の間に立派に答へた。人間の眞理なら、人間の體驗さへあれば判る道理である。

併し學者は、此の明快な答辯にも拘らず、イエスを許さなかつた。イエスは自らが長老學者達に殺される事を繰返し預言する一方、勇敢に偽善なる學者を攻撃するのだつた。

イエス祭司長及學者に殺される事を繰返し預言す

我等エルサレムに上り人の子は祭司の長と學者等に付れん。彼等これを死罪に定め、異邦人に付し、又これを嘲弄し鞭ち唾し且これを殺さん。斯て第三日目に甦るべし。(マカ傳十章三十三節)

イエス偽善なる學者を攻撃す

イエス教をなせる時かれらに曰けるは、長き服を衣てあるき市上にて人の間安、會堂の高坐進席の上座を好み、また寡婦の家を吞いつはりて長き祈をする學者の謹防よ。彼等の審判かるゝこと尤も重し。(マカ傳十二章四十節)

マタイ傳二十三章の全部も亦學者とパリサイ人の攻撃で満たされてゐる。

學者の陰謀

一體、ユダヤ人は智慧を尊重した。故に學者は社會から尊敬され、高い地位に置かれてあつた。例へば宴會に於ても學者は親より上席につく事が出来た。イエスは宴席の上座に座して得々たる學者に對しても冷罵を加へてゐる事は後段習慣の中に述べる如くである。イエスは斯うした愚かな學者と交る事を快しとせず、之を痛罵した爲め學者はイエスを捕へて殺す事に決心した。そしてイエスを捕へた時彼等は凱歌をあげ、又イエスを嘲笑した。

祭司長學者イエスを詭計をもつて捕へんと計る

さて過越即ち除酵節の二日前に祭司の長と學者たち詭計を以てイエスを執へ殺さんとし、曰けるは祭の日には爲べからず恐くは民の中に亂起らん。(マカ傳十四章一節)

學者達イエスを捕へて凱歌を擧ぐ

平旦に及び直に祭司の長長老學者たち凡の議員と共に議てイエスを縛り曳行てピラトに渡せり。(マカ傳十五章一節)



學者及祭司長イエスを嘲笑す

祭司の長學者等も同く嘲弄して互に曰けるは、人を救て自己を救ふ能はず、イスラエルの王キリストは今十字架より下るべし。然ば我儕見て之を信ぜん、又ともに十字架に釘られたる者等も彼を罵れり。(マカ傳十五章卅一節)

今日我國に於ても、智識階級と労働階級の争ひが起つてゐるが、智識階級は弱いもので、労働階級の下で下働さしか出来ない。若し智識階級が、自己の智識を特權として労働者の上に座らうとすれば誤りである。

印度のブラマ教は智識を何より尊び、智識のないものを卑しめ、智者は自らの着衣の色さへ特別なものとして夫れを誇つてゐるが、當時のユダヤに於てもブラマ教に似た風習があつた。イエスは此の誤れる學者階級に對して突喊して行つた。

第五節 預言者としてのイエス

民衆の  
預言者

イエスは聖靈を經驗することによつて、預言者の經驗を持つた。イエスが超人間の人物であると考へられたのは全くこの預言者的要素からである、民衆はイエスを預言者だと考へた。それは一回や二回そう考へたのでは無くて、彼の公生涯が始まつて十字架で死ぬまで、そう考へられたのであつた。その爲めに随分無理な注文をするものもあつた。例へば、『宴會の席に來た女がどんな女であるかをイエスが知つてゐる筈だ』(ルカ傳七章卅九節)とか『汝預言者ならば、汝を撃つものは何人なるかを云へ』(マタイ傳廿六章六八節)とか云ふのがそれである。

民衆の預言者としてのイエス

イエスの名播り或人は之をエリア、或人は往昔の預言者の如き預言者なりと云ふ……

……マカ傳六章五節  
……ルカ傳七章十五節  
……ルカ傳七章三九節  
此人預言者たらば捫りし者の誰なるかを知らん……



古の預言者の魁れるなりと云へり……………ルカ傳九章八節  
 ナザレのイエスは神と萬民の前に於て行と言大なる能ある預言者なりし……………ルカ傳廿四章九節  
 或人はバプテスマのヨハネ、或人はエレミヤ、或人はエリヤ、また預言者の  
 一人なりと云へり……………マタイ傳十六章十四節  
 衆人云ひけるは之はガリラヤのナザレより出でたる預言者なり……………マタイ傳廿一章十一節  
 イエスを執へんと欲ひ謀しかど民を畏る、そは人々彼を預言者とすればなり  
 ………………マタイ傳二十一章四十六節  
 ………………マタイ傳二十六章六十八節  
 キリストよ、汝を撃者は誰か預言せよ……………マタイ傳二十六章六十八節  
 汝は神より來りし師なり……………ヨハネ傳三章二節  
 主よ汝は預言者と知れり……………ヨハネ傳四章十九節  
 イエスの奇蹟を見て來る可き預言者と云ふ……………ヨハネ傳六章十四節  
 民衆彼を預言者なりと云ふ……………ヨハネ傳七章四十節  
 預言者はガリラヤより出づるとなし……………ヨハネ傳七章五十節  
 彼は預言者なり……………ヨハネ傳九章十七節

イエス自らも或種の預言者であることを自任して居たのである。

預言者は其故郷の外に尊れざるなし……………マカ傳六章四節。マタイ傳十三章五七節  
 預言者はエルサレムの外に殺されず……………ルカ傳十三章卅三節

イエスは預言者の運命を熟知して居た。故郷に容られず、郷黨に愛せられ無いで、遂にエルサレムで殺されるのであると云ふことをあまりによく知つてゐたのである。そしてそれが自己の運命であるとした。

豫言者
としての
イエス

イエスは自らが預言者ヨハネより大なるものであり、ヨナより、ソロモンより、又は神殿より大なるものであると言明した。預言者の時代は既に過ぎて、イエスと共に神の國が實現したのだと説いたのである。即ち、イエスが自らを預言者と自任すると共に預言者以上であることをも自覺したのであつた。

預言者に関するイエスの言説



預言者もかく追められたりき……マタイ傳五章十二節  
 律法と預言者を廢る爲に來れりと思ふな……マタイ傳五章十節  
 欲する如く人にするは之れ律法と預言者なるなり……マタイ傳七章十二節  
 偽の預言者を謹めよ……マタイ傳七章十五節  
 預言者なるを以てその預言者を接るものは預言者の報賞を受く……マタイ傳十章四十一節  
 預言者と律法の預言したるはヨハネの時までなり……マタイ傳十一章十三節。ルカ傳十六章十六節  
 ヨハネは預言者より大なりされど天國の微者より小也……マタイ傳十一章九節  
 ヨナより大なるもの此處にあり……マタイ傳十二章四二節  
 預言者と義人は汝等が見る所を見得ざりき……マタイ傳十三章十七節  
 パリサイ人よ汝等は預言者の墓を立つ……マタイ傳廿三章廿九節  
 我汝等に預言者と智者と學者を遣さん之を殺さん……マタイ傳廿三章卅四節  
 噫エルサレムよ預言者を殺すものよ……マタイ傳廿三章卅七節  
 偽預言者起りて多くの人を欺かん……マタイ傳廿四章十一、廿四節  
 若モーセと預言者に聽ずばたとへ死より甦る者ありとも其勳を受ざるべし……ルカ傳十六章卅一節

然らば、イエスは預言者として、どんなことを預言したか？ イエスの預言の中心は矢張り「神の國」の問題に就てゝあつた。即ち預言者イザヤが預言し、預言者エレミヤ、預言者ダニエルが預言して來た理想國に就てゝあつた。神の國の出現はユダヤ國民のユートピアであつた。それは直に全人類の運命を支配することであつた。それは歴史の終末に就ての大きな問題であつた。その預言は直に歴史に關する問題であつた。つまり一種の實踐的歴史哲學であつた。歴史の傾向がわかる人間には預言は出来る筈である。近代に於ける學術的預言の中は必しも珍らしくは無い、天文學に於ける遊星に關する預言、アインシュタインの相對性原理から割出された太陽より來る光線の屈曲に關する預言、原子論から割出された未発見の原子の預言、植物の進化的體系より見たる預言等、學問より見たる預言の中はあまり珍らしく無い。然し人類の運命に關する預言は珍らしいとせられる。生理的預言は必しも困難では無い。心理的、精神的の預言は決定論に導く。然し、若しその性格が決定的であり、革命と



悔改めの無い場合には、不幸にして、心理的決定の観測は的中する。預言者の預言はこの心理的、精神的傾向の観測であつた。それが澄み切つた良心に、神よりの聲として喚ぶ時、我等はその預言が燃ゆる燄の舌として舊約聖書に記されてゐるのを見る。

イエスの預言は往昔の預言者の如く地中海の諸民族に關する預言では無かつた。また王や大臣の預言では無かつた。イエスは寧ろそんなことを預言する時代は過ぎたとしたであらう。イエスは王や大臣の時代より「神の國」の出現に關する預言が接近したる現下の問題であることを思つたのであらう。その爲めか、イエスの預言は極く狭められたる領域に就てゐる。

イエスの豫言

即ち、神の國の出現につき、メシヤにつき、ユダヤ民族の運命につき、神の國の住民につき、終末の日につき、自己の運命と弟子の運命に關するものが最も多いのである。最も預言的分子の少ないヨハネ傳を見ても次の如く譯山の預言がある。

イエスの預言

- 天開けて神の使人の子の上に昇降するを見ん……………ヨハネ傳一章五十一節
- 此宮を毀て我三日にて之を建てん……………ヨハネ傳二章十九節
- モーセ野に蛇をあげし如く人の子も擧らる可し……………ヨハネ傳三章十四節
- 汝等をして奇しめん爲めに更に大なる事を彼に示さん……………ヨハネ傳五章二十節
- 末日に人を甦らすべし……………ヨハネ傳六章五十四節
- 暫く汝等と共にあり、而して後われを遣し者に行かん……………ヨハネ傳七章三十三節
- 活ける水川の如く流れ出づべし……………ヨハネ傳七章三十八節
- 子をあげし後我の彼なるを知らん……………ヨハネ傳八章二十八節
- 地よりあげられなば萬民をひきて我に來らせん……………ヨハネ傳十二章三十二節
- 弟子は後之を知るべし……………ヨハネ傳十三章七節
- 我を信じてキリストとせん爲今より告ぐ……………ヨハネ傳十三章十九節
- 暫く汝等と共にあり後我を尋ねん……………ヨハネ傳十三章十九節
- ペテロに關する預言……………ヨハネ傳十三章三十六—三十八節



聖靈につき……ヨハネ傳十四章二十六節

ペテロの使命につき……ヨハネ傳十一章十八節

一人の弟子の待つことにつき……ヨハネ傳十一章十二節

終末の

問題

マカ傳に現たる預言は「神の國」イエスの「十字架」及「甦り」終末の日「審判」に關する物が多い。終末的思想を最も著しく書き現して居るのがマタイ傳である。マタイ傳では終末思想が最も顯著に出て居る。それで全體の結構が預言的である。その中で最もよく目だつのがイエスが人の子として雲に乗つて來ると云ふ預言である。その預言はイエスがカヤバの審判廷でも述べたことであるが次の如く繰返して預言して居る。

預言者としてのイエス

人の子其國を以て來るを見るまでは茲に立つ者の中に死なざるものあらん……マタイ傳十六章二十八節  
世改まり人の子榮光の位に座するとき汝等も十二の位に座してイスラエルの十二の支派を審くべし……

マタイ傳十九章二十八節

神の國を汝等より奪ひ、其果を結ぶ民に與へらるべし……マタイ傳二十一章四十三節

人の子の權威と榮光をもて天の雲に乗來るを見ん……マタイ傳二十四章三十節

人の子己れの榮光をもて諸々の聖使を率來るときは、その榮光の位に座し萬國の民を

その前に集めん……マタイ傳二十五章三十一節

人の子大權の右に座し雲に乗るを汝等見るべし……マタイ傳二十六章六十四節

ルカ傳で見ると、イエスがエルサレムに入城すると直に神の國が現れるやうに思ふて居たものも有つたやうである。(ルカ傳十九章十一節)それで弟子の間にも色々神の國統治の具體案を考へて居たやうである。それに對して神の國の住民が嬰兒の如きものであり、再生の人であり、謙讓の民であり、十字架を負ふもののみが進み得る境地であることを説いたが、民衆と弟子とは全然それがわからなかつたのである。イエスとしては雲の上に乗つて來る「人の子」の姿と、十字架を負はねばならぬ人の子の姿の間に唯一つの「ヨナの徴」(マタイ傳二十三章卅九節)を考へてゐたのであらう。イエスとしては榮に入る部分は全く神の力による部分であつて、聖書に應ふだ



けの痛めるメシヤとして歩めば善いと考へたに違ひはない、そうすれば預言は凡て充されるのみならず、死後に於ても預言が的中して行くこと考へたに違ひあるまい。

初めの程は、イエスも雲に乗つて来る人の子の姿が弟子の死なぬ中に現れるやの如く考へたやうであるが、その後、それは全く父なる神のみ知り給ふことであると訂正されたかの如くに考へられる。勿論『人の子が國を以つて来る』と云ふことを、ルカ傳の他の部分にある如くに、既に『汝等の衷にあり』と取り、イエスがメシヤである以上、神の國が既に來て居るのだと取れば、イエスが少しも訂正したものでは無いとも云へス。此邊は實に不明瞭で有つて、イエスが詩人的傾向の人であつただけに、言葉の意味をどの程度まで現實的に取つて善いのかわから無い。弟子達には『神の國は汝等の衷にあり』と云ふ意味がわからなくて、飽迄客觀的出現を期待して居たやうである。

イエスの言葉を精神的にとらならば、イエスの預言は適中して居る。彼が十字架にかゝると共に萬民がイエスに引つけられて行き、イエスの父なる神を中心として新し

き人間の運動が始まつたのであるから、イエスの言葉は必しも虚妄でも無いのである。たゞ雲の上なる人の子に就てはまだ見ることが出来ない。そこに色々な説明と信仰とが起つて來る理由である。

父なる神の支配

然しイエスはそれらの問題は人間以上の問題であつて、たゞ『父なる神に委せておきさへすれば善い』とせられたのである。此處にイエスの信仰の大きな出發がある。即ち終末思想も何もかも凡て、父なる神に委せ切るところに、イエスの大きな宗教があるのであつて、近代の批評家や宗教家が、イエスの信賴した「父なる神」の支配する歴史を忘れ、たゞ人間の相場で歴史的決定を見、色々心配することは、全く間違つてゐると云はねばならぬ。イエスが預言者の最後に立つと云つた意味は此處であらねばならぬ。此上は傾向とか豫測とか云ふことよりか、たゞ父なる神と合一して完全なる勝利を地上に樹立すると云ふこと——即ち神の國が確立すると云ふことがイエスが預言者より出で、預言者以上の



ものであると云ふ理由であらねばならぬ。父なる神に委せ奉ることによつて歴史も預言も凡てが成就すると云ふのがイエスの信仰であつた。我等はこの點を忘れてならない。で「雲の上の人の子」を期待する必要があるにしても、それはこの立場と信仰を離れて考ふ可きとでは無いのである。イエスの努力は全くここに有つたとせねばならぬ。「惑ひに入らぬやう祈れ」とのイエスの忠告は今も變らぬものであると私は思ふ。

### 第六節 イエスの智慧の超越性と有限性

イエスの  
超人性

イエスが人間以上の能力を持つて居る神の預言者と仰がれたことは不思議では無いのであつて、イエスは種々と超人間的の能力を持つて居たやうに福音書では書かれてゐる。即ち或一種の透視の力があつたかの如くに書かれて居る。

意中を知る………マタイ傳九章二節、ルカ傳五章二十二節

心中を知る………ルカ傳六章八節  
問はんとするを知る………ヨハネ傳十六章十九節

これ等の三つの場合はイエスが問はんとするものの心中を豫知したと云ふので別に不思議で無いと云へば、不思議では無いが、次の八個の場合はどうしても透視の力であると考へねばならない。

ナタナエルの居場所………ヨハネ傳一章四十八節  
スカルの女の前夫の數………ヨハネ傳四章十七節  
ペテロの漁場所………ルカ傳五章四節  
王の大臣の子の回瘡………ヨハネ傳四章五十一節  
十二年血漏を患ひし女のイエスに觸れしこと………ルカ傳八章四十八節  
ラザロの死につき………ヨハネ傳十一章十四節  
最後の夕餐を取る場所の撰定………マカ傳十四章十三節  
ムダのこと………ヨハネ傳十三章十一節



然し只之だけであるならば未だ問題にはならない。然しイエスが奇蹟を行つたことが四十六回も書かれて居るので、之等の事實を総合すると、イエスが如何にも超人であることを弟子達も群衆も考へたに違ひない。

その意味であらう、ヨハネ傳は三ヶ所にイエスが超人的知力を持つて居たと註を加へてゐる。

イエス凡ての人を知りまた人の心の中を知る……ヨハネ傳二章二十四―二十五節

イエス信ぜざるものは誰、己を賣すものは誰と云ふことを元始より知る……ヨハネ傳六章六十四節

弟子はイエスの知らざる所なく問ふの用なきを知る……ヨハネ傳十六章三十節

之等の記事を信用し得るとせば弟子達はイエスが普通の凡人では無く、超人的知力を持つて居る人であると信じたに相違ない。

そこで問題になるのが、イエスの超人的知力は果して全智全能なる神の如き知力であつたか或は制限せられものであつたかと云ふことである。

有 限 性  
の イ エ ス

イエスの智慧が全く有限的なものであつて普通の人間以上に出ないものであると云ふ考へを持つ批評家も随分澤山あるが、シュミードルの如きはその代表的批評家である。

彼は福音書から左の九ヶ所を撰び出して、平凡人としてのイエスを組立んとした。最初の六つは有限性のイエスであり、後の三つはシュミードルの考では奇蹟否定のイエスであるとするのである。

一 イエスの狂態

その親族のものこれを開き、イエスを取押へんとて出て来る、イエスを狂へりと謂てなり。(マカ傳三章二十一節、三十一―三十五節)

二 末日を知らぬイエス

その日その時を知るものなし、天にある使者たちも知らず、子も知らず、たゞ父のみ知り給ふ。(マカ傳十三章卅二節)

三 善ならざるイエス



四 聖靈より下位にあるイエス

イエス言ひ給ふ「なに故我を善と云ふか、我一人の外に善きものはなし」。(マカ傳十章十八節)  
言をもて人の子に従ふものは赦されん、然れと言もて聖靈に逆ふものは、この世に於ても後の世に於ても赦されじ。(マタイ傳十二章卅二節)

五 絶望のイエス

わが神、わが神なんぞ我を見捨て給ふや。(マカ傳十五章卅四節)

六 兆を與ふるを拒めるイエス

徴は今の代に斷えて與へられじ。(マカ傳八章十二節)

七 奇蹟不能のイエス

彼處にて何の能力ある業も行ひ給ふこと能はず。(マカ傳六章五節)

八 ヨハネへの答 (奇蹟輕視とシユミードルはとる)

盲者は見、跛者は歩み、癩病人は潔まり、聾者はきき、死にたる者は復活され、貧者は福音を聞かせらる。(マタイ傳十一章五節)

九 反バリサイ反サドカイ精神

イエス彼等に曰ひけるは戒心してバリサイとサドカイのパン種を慎め。(マタイ傳十六章六節)

自	己
制	限

然しイエスの有限性を示す章句は、常に右の九つだけに止る必要は無い。私は猶多くの場所を指摘することが出来る。

イエスの有限性を示す句

- 我何事も自ら行ふ能はず.....ヨハネ傳五章十九—三十節
- 我自ら何事もなさず.....ヨハネ傳八章二十八節
- 父は我より大なり.....ヨハネ傳十四章二十八節
- 汝等我よりも大なることをなさん.....ヨハネ傳十四章十二節
- 唯父に備られたるものは賜るべし我が與ふべきにあらず.....マタイ傳廿章二十三節
- 我意をなさんとするに非ず遺しもの心なり.....ヨハネ傳六章二十八節
- 我に捫りしものは誰ぞ?.....ルカ傳八章四十五節
- かれを何處に置きしか.....ヨハネ傳十一章三十四節

もしイエスが全能なる神であるなら『我に捫りしものは誰ぞ』と質問を發するのが第



一不思議な話である。質問する迄もなく、知つて居るべき筈のものである。イエスの「神の子」と云ふ意味の解釋にしても、實に軽いものであつて（ヨハネ傳十章三四―三七節）決して全智全能若くは實在的の神の子といふやうな深い意味を持つたものとは考へられ無い。

狂  
人  
辨

然しイエスが狂人扱ひにせられ惡靈に憑つかれたものであると考へられたことは少しも彼が有限性の人物である證明にはならない。私に云はせれば寧ろその反對に取る事が出来る。

イエスが惡靈につかれたと云ふ記事はマタイ傳に二ヶ所、ヨハネ傳には四ヶ所出て居るがマタイ傳によれば二度ともガリラヤに於ける批評であり、ヨハネ傳によれば四度ともエルサレムに於ける批評である。それで之等の批評を綜合して見ると、イエスが惡靈の主であると云ふことはイエスの反對派の間には相當擴がつて居たものと見て差支え無い。

併しその惡靈にとりつかれて居ると云ふ批評の原因を調べて見ると、イエスが惡鬼を追ひ出したからとか（マタイ傳九章三四節同十二章二七節）イエスがユダヤ人に向つて『律法を守るものなし』と云つた場合（ヨハネ傳七章廿一―廿二節）とか、『神より出づるものは神の言をきく、汝等のきかぬは神より出でぬに因る』と云つた場合とか（ヨハネ傳八章四七―四八節）『我生命を捨つる權あり、また之を得る權あり、我この命令をわが父より受けたり』と叫んだ場合（ヨハネ傳十章十八節）とかで有つて、凡て超人的能力或は知力を宣言した場合に彼は狂人扱ひにせられて居るのである。

それであるからイエスが狂人扱ひにせられたことは少しも彼の變態性を示す理由にならないのみならず反つて彼が超越的能力を持つて居た證據になるのである。

無限なる  
イ  
エ  
ス

然しイエスのその超人的智力も決して無限ではあり得なかつた。もしもイエスに『あなたの智慧は無限です』と云ふなら、必ずイエスは、今日もまた繰返して云はれるであらう『智慧の無限なるものは



一人なり、それは神なり」と。(マカ傳十章十八節參照)

ヨハネは『イエスは知らざるところなく弟子の尋ぬるは要なきことであると云つた』と書いて居るが、『我は自ら何事もなし能はず』とイエスに云はしめた同じ著者の筆である事を考へると、之は神の如く全智であると云ふ意味では無く、遣はされたものとしての超人的智力の所有者との意味であると考へて差支え無からうと思ふ。

イエスは繰返し、自己が創造者の下位にあることを説いて居る。若しも我等がイエスを神とのみ考へ、人間としてのイエスを忘れて了ふならば、イエスは必ず悲しく思はれるに違ひない。勿論イエスに神の分子の有つたことは否定は出来ぬ。神の分子の無い人間としてのイエスは、神の表現としての藝術(ロゴス)にはならない。それかと云つて、神のみあつて、表現の法則に縛られ、受肉者としての苦難を嘗めた肉の人間なるイエス即ち有限の中に自らを示現した人間としてのイエスを忘れるならば、あのイエスの努力は何の役にも立た無くなるのである。

イエスの歩んだ道は神を人間に取り返すことにあつた。その爲めにあれだけの努力をしたのである。もし我々がイエスの人間であることを忘れ、あの大きな人間としての神の藝術を忘れるならば、我等は實に呪れたものである。

此意味に於てイエスの智慧は決して無限ではあり得なかつた。

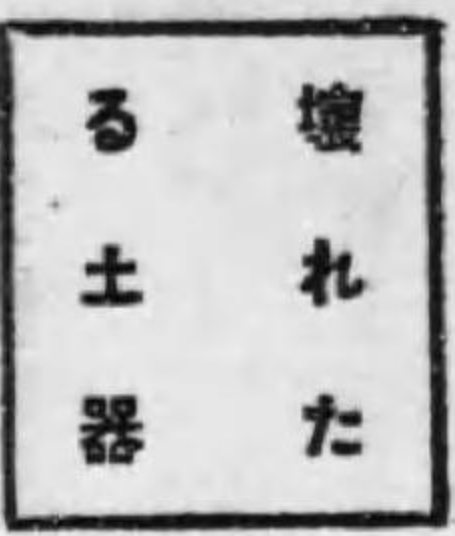
人間イエスをたい神とし、その智慧を有限としない者は、イエスを幽霊扱ひにするに外ならない。幽霊の如きイエスならば、イエスは我等の心にピッタリとは來ない。人間的な、充分人間的なイエスなればこそ、神の性質を帯び又我等の心の中にピッタリと混融するのである。我等がイエスを信じ、又イエスと離れ難き處は、イエスが人間的な、充分人間的な處にある。

既にイエスは人間である。従つて彼の智慧も有限である事は言ふまでもない。イエスは相對性原理を知らなかつたらう。原子の重量も知らなかつたらう。而し夫れはイエスに取つて決して恥辱ではない。



イエスの智慧は有限である。然しイエスの智慧はその有限を以つて無限へ橋渡しすることにあつた。イエスの教は神の藝術としての人間の眞理を教へる事にあつた。イエスが、久しく絶えてゐた我等と神との交渉を、もう一度開いてくれた事は、何より尊いことである。その一時絶えた神との交渉を繼いでくれた事は、とりも直さず贖罪である。

贖罪とはイエスが、人の罪を被ひ給ふた事をいふのだと言つて、幾何學的の重なりと思つてはならない。愚かに、貧しく、あえぎつゝある生命を、今一度元氣づけ、新しき生命を吹込み、衰へたるものを再び神に回復してくれる事であればならない。此の經驗は十分人間的になつた者でなくば、經驗の出來ぬ處のものである。謂はゞ神の人間化である。ロツチエは『實在中の最實在は人格者中の最人格者である』と言つてゐるが、一般の人間は、眞の實在の何分の一かを經驗するのみだ。



で、イエスを羽根を切つた天使の如くに見るのは、イエスに對する胃瀆である。イエスは十分人間であつたからこそ、神を我等に回復することが出来るのである。我等は人格の底に罅の這入つた人間である。然しイエスはそれでは無かつた。

ベグビーは倫敦の貧民窟の九人のゴロツキを主材として「壊れた土器」と題する實驗談を書いてゐるが、我等は、その人々を笑ふ事は出來ない。我等自らが、壊れた土器である。我等に聖靈の盛り得ざるは、我等の素焼の土器の底が壊れてゐるからである。此の地球は人間の塵箱である。そして我等はその塵箱に捨てられた茶碗の破片の如きものである。

然るに、或人はイエスをも壊れた土器の破片と見やうとする。佛國のピネーサングルは「イエスの發狂」と題する書を著し『イエスの父は酒呑であつた爲めに、イエスはその遺傳を受け、變態性慾の持主であつた。彼が未婚で死んだのはその爲めである。



イエスは又酒亂で左の肺が悪かつた。そしてイエスが退化した人間であつた證據は、イエスの一族は絶えてゐる』と言つてゐるが、抑もその證據は何處にあつたか。斯くの如き荒唐無稽の言をなすのは、宛ら塵箱の中の素焼の土器が、借越にも發言權を要求してゐるやうなものだ。破れた土器を以て、イエスを見るのは誤りである。

イエスは聖靈の體驗から物を知つた。夫れはイエスの力でなく、イエスによる神の經驗の賜物であつた、だからイエスは決して自らの智慧を誇りはしなかつた。奇蹟さへイエスは控え目にした。イエスはあまりに謙遜な人間であつた。

『我は柔和にして心卑ければ我が軛を負ひて我に學べ』と云ふたイエスはその人間性の衷に神を孕んだのである。もし人間としてのイエスが神を孕んだので無ければ、イエスの宗教は我等に何の關係も無い。眞の人間は眞の神の子であらねばならぬ。そう教へてくれたのがイエスであつた。ここに完成した救があり、我等の再生の道が開かれて居るのである。

### 第七章 イエスの智慧の内容

活きた  
る體験

イエスの智慧の内容は、決して一般學者の矜る智識の如く難解なものではなかつた。イエスは、自らの智慧は、學者や哲人に分らずとも、嬰兒にわかるものであるといつてゐる。

#### 赤兒に直觀されるもの

其ときイエス答て曰けるは、天地の主なる父よ此事を智者達者に隠して赤子に顯したまふを謝す。(マタイ傳十一章廿五節)

然しイエスの眞理は、我等が歸納的演釋的に知り得るものではなかつた。イエスの智慧は體験による生命の道であつた。

#### イエスと永生命

生命.....ヨハネ傳一章



永生かぎりなきいのち命いのち.....ヨハネ傳三章十五、十八節

同四章十四節、同四章三十六節、同五章二十四節、同五章二十六節

聖書かぎりなきいのちに永生かぎりなきいのちありと尋ぬ.....ヨハネ傳五章三十九節

生せいを得んために我わたしは來きたらず.....ヨハネ傳五章四十節

永生せいに至るかて糧かて.....ヨハネ傳六章二十七節

人の子を見て信しんずる者は永生せいを得.....ヨハネ傳六章四十節

我われを信しんずる者は永生せいあり.....ヨハネ傳六章四十七節

窮かぎりなく生せいくべし.....ヨハネ傳六章五十一節

我われを飲のまざれば生命せいなし.....ヨハネ傳六章五十三節

我わが肉にくを食くひ我われ血ちを飲のむ者は永生せいあり.....ヨハネ傳六章五十四節

父ちちによりて我われ生せいける如ごとく我われを食くふ者ものも我われに由よりて生せいくべしこれ天あまより降くだれるパンぱんなり.....ヨハネ傳六章五十七、八節

生命せいを與あたふるものは靈せいなり.....ヨハネ傳六章六十三節

靈せい也いのち生命せい也.....ヨハネ傳六章六十三節

永生せいを持もつものは汝なんぢなり.....ヨハネ傳六章六十八節

我われ道みちを守まもらば窮かぎりなく死しを見みざるべし.....ヨハネ傳八章五十一節

永生せいを賜たまふ.....ヨハネ傳十章二十八節

我われは生命せいなり.....ヨハネ傳十一章二十五節

永遠とこしへに死しぬとなし.....ヨハネ傳十一章二十六節

生命せい也.....ヨハネ傳十三章六節

我われに永生せいを與あたへんがため凡おほむねての者ものを制おさむ權けん威ゐを我われに賜たまひたれば也.....ヨハネ傳十七章二節

永生せいとは神かみとキリストを信しんずることなり.....ヨハネ傳十七章三節

生命せいを得えさせんが爲ためなり.....ヨハネ傳二十章三十一節

或あるる人ひと々は、神かみが判わからぬといふが、目めや鼻はなや舌したや耳みみに依よつての、夫その

れも、僅わずかか二十年にじゅうねんや、三十年さんじゅうねんの體てい験げんで、人にん間げん幾いく億おく年ねんの世界せかいの體てい験げんが解と

る筈はずはない。

神かみの體てい験げんは、自みづか己みづかの裡うちに動うごく神かみを體てい験げんする事ことである。「神かみは生せいきてゐる」といふの

神かみの體てい験げんは、自みづか己みづかの裡うちに動うごく神かみを體てい験げんする事ことである。「神かみは生せいきてゐる」といふの

神かみの體てい験げんは、自みづか己みづかの裡うちに動うごく神かみを體てい験げんする事ことである。「神かみは生せいきてゐる」といふの

神かみの體てい験げんは、自みづか己みづかの裡うちに動うごく神かみを體てい験げんする事ことである。「神かみは生せいきてゐる」といふの

神かみの體てい験げんは、自みづか己みづかの裡うちに動うごく神かみを體てい験げんする事ことである。「神かみは生せいきてゐる」といふの

神かみの體てい験げんは、自みづか己みづかの裡うちに動うごく神かみを體てい験げんする事ことである。「神かみは生せいきてゐる」といふの

神かみの體てい験げんは、自みづか己みづかの裡うちに動うごく神かみを體てい験げんする事ことである。「神かみは生せいきてゐる」といふの

神かみの體てい験げんは、自みづか己みづかの裡うちに動うごく神かみを體てい験げんする事ことである。「神かみは生せいきてゐる」といふの

神かみの體てい験げんは、自みづか己みづかの裡うちに動うごく神かみを體てい験げんする事ことである。「神かみは生せいきてゐる」といふの

神かみの體てい験げんは、自みづか己みづかの裡うちに動うごく神かみを體てい験げんする事ことである。「神かみは生せいきてゐる」といふの

父ちちなる  
神かみの  
見みる



は、内なるものを見た時に於て、始めて判るので、決して理窟ではない。夫れは嬰兒にも分るものである。神は、人を愛するといふ目的労働をし、義を求むる生活を営み、動いてゐる中に、解つて来るものである。然るにイエスは完全に神の父なることを知り救の力を知り得た。彼は自分の内に神を發見したのである。目や鼻のやうな不完全な感覺を通じて知り得る機械的存在を神と云ふのではない、全身全人に依つて、爆裂彈の如く生命を投出す時に神は分るものである。我等が全身全人生で前進する時、その行動の中に明に神を認め得るのである。頁の上の神は、神ではない。我等は生命夫れ自身の上に血を以て描かれた默示を受けねばならない。十字架のイエスに於て人類は初めて神が父であることがわかり我等がその子であり又如何なる罪よりも救はるべきことを完全に知り得たのである。

眞	と	眞
イ	エ	ス

神と生命の體驗は、哲學で得られるものではない。従つてイエスの智慧はゴマカシではない。世俗や政治の智慧でなく、生命そのもの、

智慧である。それは體驗せられた眞理そのものであつた。

世俗政治の智慧でない

爰に主人、不義なる支配人の爲しし事の巧なるによりて、彼を譽めたり。この世の子らは己が時代の事には、光の子らよりも巧なり。(ルカ傳十六章八節)  
 智慧は智慧の傳にさとしとせらる。(マタイ傳十一章十九節)

眞理とイエス

眞理を知らん……………ヨハネ傳八章三十二節  
 眞理は我等を自由にす……………ヨハネ傳八章三十三節  
 眞理を以て認め給へ……………ヨハネ傳十七章十七、十九節  
 汝の言は眞理なり……………ヨハネ傳十七章十七節  
 我審判は眞也……………ヨハネ傳八章十六節  
 二人の證は眞也……………ヨハネ傳八章十七節  
 眞理に就て證せん爲めなり、凡て眞理につくものは我聲をきく……………ヨハネ傳十八章三十七節  
 我は眞なり……………ヨハネ傳十三章六節



我は眞理なり

西田幾多郎博士は『生命の體驗は、若くして死せるイエスが十字架上に流した血の中に經驗する事が出来る』といつてゐるが、實に然うである。道德、眞理、生命は共に最も充足した人間性の中に發見し得るものである。イエスが『我は眞理なり』といへるは、物理的眞理をいふのでなく、人間的眞理を言ふのである、そして此の十分眞理である眞理即ち人間的眞理の外に眞理はない。此の眞理を掴む時、我等はイエスの再生の道を發見するのである。

永生を知るといふ事も、畢竟、イエスを知る事でなければならぬ。永生とは先づこの主なる神を知ると共に、その子イエスを知る事である。(ヨハネ十七章三節)

我等が之を知る事に依り、神自身の生活を我等自ら體驗する事が、取りも直さず永生を得る事であり、眞理を得る道であるのだ。

佛教では自らが靈魂不滅であるといふが、イエスの宗教ではそうではない。イエスの教へに依れば、我等自らが靈魂不滅であるのでなく、我等が神に没入する時、永遠

の神を知る故に永生を得るのである。神の中に於て始めて夫れが興へられるのである。換言すれば永生は神より外にあり得ない。神を知りたる事に依り始めて神を中心にして神の絶對の中に溶け込み此處に永生を得るのである。之が眞理で無くて何だらう。之を體驗し之を教へてくれたゞけでもイエスは「神」の智慧を持つて居たとして善い。

救の發見

イエスの智慧は十分人間的であつた。夫れはパリサイ學者の夫れの如くではない。パリサイは「救」の世界を知らなかつた。イエスが「救」を説いた時に吃驚した。「救」は今日の社會に取つても驚く可き眞理である。科學者は此の眞理を發見しないし又信じ得ない。或人は、イエスを全智全能の如くに考へたが、イエスにして見れば、イエス自らが全智全能であるのではなく、イエスに内在する救の神が全智全能なのであつた。そして最も人間的なもののみ「救」を知つてゐる。

イエスは、我等の經驗すると同じ人間である。イエスは、人間であつたから、人間



の欠點を知つてゐた。それで此欠點を除く爲めに神の力を體驗したので、我等に最も近い、最も大きな味方となつた。此處にイエスの救の力の發見がある。イエスは、我の來れるは碎けたる人間の味方とならん爲めだと言つた。我等はイエスを自らの中に取入れる事に依り、碎けたる素焼の土器を修繕しなければならぬ。素焼の下にイエスを當てがつて日常生活を神に近く引張つて行かねばならない。救の法則の發見は人類生活に於てはダアヴキンの進化論の發見より偉大である。

聖	靈
の	經
驗	

人間としてのイエスは決して神ではない。従つて全智ではない。只だ、イエスは我等の經驗し得ない聖靈を經驗してゐた。それで、常に聖靈に指ざしてゐるのであつた。『聖靈汝にゐまして』とあるのが夫

れである。そしてイエスの説いた聖靈とは「神と神の内住する力」の事である。近代になると共に聖靈の經驗は漸次蒸發した。我等は今少し我等の良心を磨ぎすまさればならない。我等の精神生活は鈍くなり、機械的となつてゐる。此の表面的な

耐へ難き不淨な生活から脱却して、進んだ目的を持ち、充分理想主義的に伸び上り、内部に突込んだ生活をするなら、我等とても亦聖靈を感じるに相違ない。

最近心理學の發達に依つて、イエスが病を癒した事も、強ち否定する事は出来なくなつた。高第批評家のブーゼットの書いた基督傳を見てもその奇蹟の八分までは肯定されてゐる。又精神醫學の發達に依つて、イエスが鬼を追出した事も、今は否定する者はない。超人的意識もモウ之を否定する者はない。

イ	エ	ス
と	聖	靈

イエスは常に聖靈と離れなかつた。イエスは神秘を通り越して、現實に於て聖靈を經驗したのである。超人と人間とが矛盾しない唯一の秘鑰は聖靈である。只だ我等は不幸にして、その主觀的な聖靈が、今日稀薄となつてゐる爲めに、夫れを得られぬのである。然し生命宗教の體驗が豊かとなれば之が得られないと云ふことはないのである。

イエスと聖靈

われ訓慰師を父より遣らん、即ち父より出る眞理の靈なり其來る時わが爲に證をなすべし。



かれ來らんとし罪につき義につき審判につき世をして罪ありと曉しめん。(ヨハネ傳一四章二六節)

二十世紀の宗教は聖靈の宗教だと云はれる。彼のロマン・ローランも二十世紀になつて始めて基督教が諒解されたと言つてゐる。そしてそれと同時に二十世紀の宗教は内的生活を豊かにし、聖靈の、又内在の生活を經驗する宗教でなければならぬ。以前、宗教は一種の迷信だと考へられた時代もあつた。併し今日に於ては新理想主義の發達、併に心理學、物理學の發達に依り、宗教が人間的眞理から出發するものである事が判明して、最早之を迷信と思ふものはなくなつた。尤も哲學的の神は冷たいが、聖靈の神は、生命の神なるか故に温い。イエスの智識は、此の聖靈の神の體驗から出發したものである。

人間としての神の經驗

イエスの宗教的體驗で有難いことは、神の認識が完全であるだけでは無く神の經驗が自己の中にあることである。

イエスはマタイ傳十一章二十七節を見ても『子を知るものは父の外

己の神に關する體驗が、特異なるものであることを述べてゐるが、その思想はヨハネ傳に最も善く顯れて居る。

父と我

我何處より來り何處へ行くを知らばなり、汝等は何處より來り何處へ行くを知らず。ヨハネ傳八章十四節  
 汝等は彼(父なる神)を知らず我は知れり。ヨハネ傳八章十五節  
 我を見しものは父を見しなり。ヨハネ傳十四章九節

之等の句を見ても、イエスが自分の持つて居る神の體驗が、エルサレムの學者や、ガリラヤのバリサイのそれと根本的に違つてゐると云ふことを知つて居た事がわかる。然らば、何處でそれが違つてゐるか云へば、イエスは『我は途なり、眞なり、生命なり』との體驗の道にまで進んで居るに反し、世俗の智慧に、その體驗としての眞理、體驗としての生命が無いのである。

イエスの聖靈の經驗と云ふのは、全くこの神を自らの中に經驗する事であつた。即ちイエスは神の子として、完全に神の姿を現し得る境地にまで進んで居たのである。



ればこそイエスは『我を見しものは父を見しなり』と云つたのである。誠に、此の境地に於て、彼は完全に神の性質を持つてゐた。

### 第八節 イエスの表現と神の表現としてのイエス

イエスの表現

イエスの宗教は、體驗の宗教である。演繹でもなく、歸納でもなく、直観に依つてのみ得るものである。従つて之を説明するに當つても、譬喩を用ひる事が、他の論理を使用するよりも優つてゐる。

生命を説明するのに『生命とは水素と酸素がどうで』と説明しても了解され難い。寧ろ譬喩を以て、『生命とは、恰かも木が生えて來るやうなものだ』と説く事を優れりとする。

嘗だにイエスの宗教のみならず、華嚴經、碧巖錄の如き、優れた體驗を記した佛教

の經典も、皆此の譬喩を多く使用してゐる。

詩形の發表

又イエスの宗教は詩の形に依て發表された。『ソロモンの榮華の極みだに、その装ひ野の百合に及ばざりし』といふが如き詩となつて現はされた。イエスの生命の躍動が詩となつたのである。今、その一二の

例を示さう。

### イエスと詩

心の貧き者は福なり天國は即ち其人の者なれば也。哀む者は幸なり其人は安慰を得べければ也。柔和なる者は福なり其人は地を嗣ことを得べければ也。饑渴ごとく義を慕ふ者は福なり其人は飽ことを得べければ也。矜恤ある者は福なり。其人は矜恤を得べければ也。心の清き者は福なり。其人は神を見ことを得べければ也。和平を求る者幸福なり。其人は神の子と稱らるべければなり。義ことの爲に責らる者は福なり。天國は即其人のものなれば也。我ために人なんぢらを罵りまた迫害いつはりて各様の惡言をいはん其時は爾曹福なり喜び樂め天に於て爾曹の報償おほければ也。そは爾曹より前の預言者をも如此せめたりき。(マタ

イ傳五章三一―二節)



我なんぢらに告ん。生命の爲に何を食ひ、何を飲み、また身體の爲に何を衣んと憂慮こと勿れ。生命は糧より優り身體は衣より優れる者ならず乎。なんぢら天空の鳥を見よ、稼となく種ことを爲す、倉に蓄ふることなし。然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり。爾曹之よりも大に勝る者ならず乎。爾曹のうち誰か能おもひ煩ひて其生命を寸陰も延得んや、また何故に衣ことを思ひわづらふや。野の百合花は如何にして長かを思へ勞す紡がざる也。われ爾曹に告んソロモンの榮華の極の時だにも其装この花の一に及ざりき。神は今日野に在て明日燼に投入らる草をも如此よそはせ給へば況て爾曹をや嗚呼信仰らすき者よ。然らば何を食ひ何を飲なにを衣んとて思わすらふ勿れ。此みな異邦人の求る者なり。爾曹の天の父は凡て此等のもの、必需ことを知たまへり。爾曹まづ神の國と其義とを求よ。然らば此等のものは皆なんぢらに加らるべし。此故に明日の事を憂慮なかれ。明日は明日の事を思わづらへ、一日の苦勞は一日にて足れり。(マタイ傳第六章二五—三四節)

簡 單  
な 發 表

イエスの智慧の發表は頗る簡單である。山上垂訓を讀む人は、容易にそれを首肯するであらう。その多くは格言として發表されて居る。聖書には夫れが數十箇所に散見する。イエスは又屢々逆理を用ひてゐる。彼は善意に於ける理窟のコネ方をも知つてゐたのだ。

逆 理

我汝らに告ん不義の財を以て己が友を得よ。此は乏からん時、彼ら汝らを永遠宅に迎んが爲なり。(ルカ傳一六章九節)

又イエスは質問的に發表してゐる事もある。

逆襲的質問

我も一言汝に問はん……………(マタイ傳廿一章二四節)  
更に譬喩的に發表したものに至つては最も興味がある。(拙著「イエスと自然默示」第二章「イエスの譬喩の研究」参照)  
譬を以て教ゆ

彼等の聽得ところにしたがひ多くかゝる譬をもて教を彼等に語れり。譬に非ざれば彼等に語らず、イエスその弟子と共に居るとき彼等に悉く之を解ききかせり(マカ傳四章三四節)

神の表  
現として  
のイエス

然しイエスの表現した何よりも大なるものは、彼の生涯そのものであつた。彼の生涯ほど大きなドラマは無い。それは完成した神の藝術であつた。イエスの生命そのものが神の言葉(ロゴスLogos)であり意



志である。

七〇

私はヨハネ傳の記者が、その福音書の第一ページに『太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき』と書いた心持を、善く理解する事が出来る。人間の側から見る時、イエスは完全な人間であり、神の側から見れば、彼は完全な神の表現であり、神の志であつた。此意味に於て彼は神の獨り子であると云つて毫も差支へは無い。

## 第二章 イエスの讀書



聖書は我に就て證するもの也。

——ヨハネ傳五章卅九節——

## 第二章 イエスの讀書

### 第一節 讀書家イエス

未だ讀 まざるか
-------------

イエスは、大なる讀書家であつた。その證據には、イエスは屢々弟子に對し、『汝未だ之を讀まざるか』と問ふて居る。讀書家でなければ、コウした言葉は吐けない筈である。

イエスは當然讀むべき書を讀まざる弟子に對し、常に『汝未だ之を讀まざるか』といつて、之を督促する口調を繰返してゐる。マタイ傳だけでも六回も出てゐる。

ダビデにつき



ダゼテその伴へる人々と共に飢し時爲し、事を讀まざるか。(マタイ傳第七二章三節)

### 祭司が安息日を犯す

又安息日に祭司らは宮の内にて安息日を犯せども罪なきことを律法にて讀まざるか。(マタイ傳第十二章五節)

### 夫婦一體

人は父母に離れて其の妻に合ひ二人のもの一體になるなりと言へるを未だ讀まざるか。(マタイ傳第十九章五節)

### 嬰兒の口へ讚美を備へたり

「然り嬰兒乳兒の口に讚美を備へたり」とあるを未だ讀まざるか。(マタイ傳第廿一章十六節)

### 隅の首石

聖書に「造家者らの棄てたる石はこれぞ隅の首石となれる、之れ主により成れるにて我らの目には奇しきなり」とあるを汝未だ讀まざるか。(マタイ傳第廿一章四十二節)

### 我はアブラハムの神

「我はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」と言ひ給へるを未だ讀まざるか。(マタイ傳第廿二章廿二節)

右の中「嬰兒の口に讚美を備へたり」は詩篇八篇十二節に、夫婦一體の句は創世紀二章廿四節に、「隅の首石云々」は詩篇百十八篇二十二節に、又「我はアブラハムの神云々」は出埃及記三章六節にある句である。イエスは之等の舊約聖書の言葉を十分に消化し、隨時隨所に、自由自在に、之を用いたのである。之等は、最も善く聖書を熟讀翫味した者でなければ、爲し能はざる所である。イエスが舊約の一言半句をもゆるがせにしなかつた事が之に依つても判明するであらう。

眞の讀	書
法	

併し如何に讀書をするといつても、夫れが只だ一字一句を機械的に暗誦するだけでは、未だ眞に讀書したとは言ひ難い。

ハーバート大學教授のメービー氏はその「文學入門」の中に「書を讀むのは、紙上の文字を讀むのでなく、その筆者の人格を讀むのだ」と記してゐるが、



まことに至言である。單に、興味本位を以て文字の上を掠め去る丈けなら、假令萬卷の書を読むとも何の益もない。

今日の人の書物の多くは、缺けた茶碗の如くである。それはその作者が缺けた茶碗の如く、部分的の人格しか持たぬものだからである。谷崎潤一郎氏の小説には異常な感覺を読む事が出来る。又倉田百三氏の小説では鋭い人間味を、石原純氏の書物では緻密な研究を學ぶ事が出来る。併しそれは何れも人格の斷片に過ぎない。之等の小説、之等の科學に對する價值判斷は、部分的の興味であつて、他の部分を被ふ事は出来ぬ。我等が之等の書物を愛讀するのは、全く人格の斷片を讀むに外ならない。若し夫れ我等が更に優れた人格に依つて、全人格の統一の出來た人の作物を讀む事が出來たら、

心核に

觸れよ

ドレほど幸福か知れない。

讀書の要諦は、書物の心核に觸れる事である。

イエスの當時は、今日の如く汗牛充棟の書物はなかつた。イエスの

讀んだ書物は、頗る多かつたとは言へない。併しイエスはその一冊づゝの書物の心核に觸れて、文字よりもその精神を讀んだ。

今日、聖書の讀者の中には聖書を尊重する餘り、活字の一字一句を神の默示とし、活字の末に至るまで神の心の籠つて居るものゝ如く考へる『文言啓示』(Verbal Inspiration)の一派があるが、之は未だ眞の聖書の讀方とは云ひ難い。我等は聖書の活字を讀まず、その心核を掴まねばならぬ。イエスは最も善く舊約の心核を掴んだ。そして之を完全に咀嚼し、自己のものとした。

然うだ。イエスは舊約聖書を我がものとしてゐた。彼は舊約の生命を讀んだ。聖書は呪でもない。神閲でもない。故に我等が今日之を讀むに當つては、斷片的、部分的であつてはならない。即ち綜合的讀方でなければならぬ。然らざれば、聖書の生命を掴む事が出來ないであらう。

我等は今日、新舊約聖書を繙いて、只だ『敵を愛せよ』『求めよさらば與へられん』



といふ格言かくげん丈だけけを頭あたまに入れるのであつてはならない、イエスの全人格ぜんじんかく的結晶てきけつしょうを見なければならぬ。斯くてイエスといふ人格じんかくが浮彫うきぼりの如ごとくに我等われらの中なかに出現しゆげんし、又我等われらと同じ水準すいじゆんに於おて我等われらに發言權はつげんけんを要求をうきうするイエスを見る事ことが出来できる。我等われらは聖書せいしよを讀んで、その生命せいめいを吸入きよひんし、神かみの人格じんかくにふれ、大生命たいせいめいに觸ふれなければならぬ。

價	値
舊	約
の	の

ジョン・ラスキンは『書しよを讀む時は、自分じぶんと同程度どうていどのものものを讀んで  
はならない。必ず教をしへらるゝ心持こころもちで讀み得る書しよを讀め』と云つてゐる。  
又エマーソンは『新刊書しんかんしよを讀むな、一年待つて反古ほんこにならぬ書しよを讀め』  
と云つてゐる。我等われらは Good reader になるために Good book を撰擇せんたくして讀む必要ひつやが  
ある。

ラスキンは『世界せかいに良書りやうしよが三冊さんさふある。その一は聖書せいしよであり、その二はダンテしんきよくの神曲しんきよく  
篇へんであり、その三はプラトンの書しよである』といつてゐる。昨日出た許せうりで聲價せいげの未だ  
定まらぬ書しよを讀むほどの勇氣ゆうきのある讀者しよくは、先づ四千年間聲價せいげを保つた良書りやうしよ『舊約聖

書』を讀まねばならない。

然しからば何故舊約聖書きよやくせいしよは四千年の久ひさしきに亘わたつて保存ほぜんされたか。夫おれは言いふまでもな  
く、神かみを教をしへた書物しよぶつだからである。神かみに依たれる生活せいかつをした一人ひとりの人間にんげん、その人ひとから民  
族みんぞくが興おこつて、その亡ほろびに至いたるまでの歴史れきしが書かかれ、又その亡ほろびに至いたつて、人は如何いかに  
しても、神かみの力ちからで救すくはるゝにあらざれば、他に救すくはるゝ道みちなしといふ、その方向ほうかうを示  
したものだからである。

イエスの讀よんだのは、救すくはるべき道みち——道德的贖罪たうてきしよくざいを基調きてうとせる新約しんやく——ではなく  
て、その以前いぜん、死滅しめつに近づちかづいて、新しき光明くわうめいを翹望せうぼうしつゝあつた時の事ことを讀んだので  
あつた。そしてイエスは舊約聖書きよやくせいしよを楯たてとする事ことによつて、荒野あゐのの誘惑いざわくの毒矢どくやからも免  
れる事ことが出来できた。

我等われらが聖書せいしよを繙ひもとかぬばならぬ理由りゆうは、外部的わいぶてきのものではなく、神かみに依たつて示しさるゝ  
處ところの救すくはるべき道みち、生命せいめいの方向ほうかうを讀む爲ために外ほかならぬ。



### 第二節 舊約聖書とイエス

舊約の
引照

イエスは、幼時、早くも聖書學校に通つたと云はれてゐるが、そのイエスが如何に聖書を善く知つてゐたかといふ事は、イエスの言葉の中に於て來る舊約の引照の如何に多いかを見ても、その一斑が窺はれるであらう。

#### マカ傳に於ける舊約とイエスの言葉

##### 舊約

- 一 創世記一ノ二七、二ノ二四
- 二 同 一ノ一四
- 三 同 一九ノ二六

- 婚姻の永遠性 一〇ノ六一八
- 神の全能 一〇ノ二七
- 上衣を取りに歸る 一三ノ一六

##### マカ傳

- 四 出埃及記二〇ノ一二、二二ノ一七、父母を敬ふ 七ノ一〇
- 五 同 二〇ノ一二 十誡 一〇ノ一九
- 六 同 三ノ六 モーセと榮永生の證 七ノ二六
- 七 同 二四ノ八 誓約の血 一四ノ二四
- 八 レビ記一三ノ四九 祭司と癩病 一ノ四四
- 九 同 一九ノ一八 愛の法 一二ノ三一
- 一〇 申命記六ノ四、五 十誡の略 一二ノ二八、三〇
- 一一 同 一三ノ一三 偽預言者 一三ノ二二
- 一二 同 三〇ノ四 撰ばれし者のため 一三ノ二七
- 一三 サムエル前二ノ一六 ダビテと供へられしパン 二ノ二六
- 一四 ヨブ 四ノ二二 凡てなし能ふ神 一〇ノ二七
- 一五 詩篇一四三ノ二二、二三 建物師に拒れたる大石 一二ノ一〇
- 一六 同 一一〇ノ一 ダビテの言 一二ノ三六



- 一七 同 一三〇一
- 一八 イザヤ六ノ九〇
- 一九 同 二九ノ一三
- 二〇 同 四六ノ二四
- 二一 同 五六ノ七
- 二二 同 五ノ一
- 二三 同 一三ノ一〇、三四ノ四
- 二四 エレミヤ七ノ二
- 二五 エゼケル一七ノ二三
- 二六 ダニエル四ノ一二、二一
- 二七 同 二ノ二八
- 二八 同 九ノ二七、一二ノ一
- 二九 同 一二ノ一
- 十字架の最後の言 一六ノ三四
- 譬を使ふ理由 四ノ一二
- 學者とパリサイの偽善 七ノ六、七
- 熱は去らず 九ノ四八
- 祈の家 一一ノ一七
- 葡萄の島 一二ノ一
- 終末の話 一三ノ二四
- 盜の巢 一一ノ一七
- からしだねの成長 四ノ三二
- 同 四ノ三二
- 凡てのこと來らざるべからず 一三ノ七
- 荒す憎くむべきもの 一三ノ一四
- 患難 一三ノ一九

- 三〇 同 七ノ一三、
- 三一 ヨエル三ノ一三
- 三二 ミカ七ノ六
- 三三 ザカリヤ八ノ六
- 三五 同 一三ノ七
- 三六 マラキ四ノ五
- 人の子靈の上のり來らん 一三ノ二六、一四、六二
- 刈り入れ 四ノ二九
- 父に子は背き 一三ノ一二
- 撰ばれし者を集め 一三ノ二七
- 羊をうつ 一四ノ二七
- エリヤ來る 九ノ一二

マタイ傳に現はれたるイエスの聖書の引照

- 一 我律法と預言者を破壊せず マタイ五ノ一七
- 二 これ律法と預言者なり(金則) マタイ七ノ一二
- 三 アブラハム、イサク、ヤコブ マタイ八ノ一一
- 四 ソドム、ゴモラ マタイ一〇ノ一五、一一ノ二三
- 五 迷へる羊 マタイ一〇ノ六
- 六 メシヤ イザヤ書二三ノ一―六
- エゼキエル三四ノ五



- 七 先驅者  
マタイ一ノ一〇、 マラキ三ノ一
- 八 エリヤ  
マタイ一ノ一四、 マラキ四ノ五、 マタイ一七ノ二〇
- 九 預言者と律法の預言したるはヨハネの時まで(結論を斷定的に與へたるもの)マタイ一ノ一三
- 一〇 審判の日  
マタイ一ノ三一、 同二四章
- 一一 祭祀を欲せず  
マタイ一ノ二七
- 一二 人の子  
マタイ一六ノ二七(權威者) ダニエル七ノ一〇  
マタイ一七ノ三二、 同二七ノ一二、 同二〇ノ二八
- 一三 ヨ ナ  
マタイ一ノ四一
- 一四 ソロモン  
マタイ一ノ四二
- 一五 イザヤ書引照(語らざる民)  
マタイ一三ノ一四、 イザヤ六ノ九
- 一六 再びイザヤ書引照(因襲の人々)  
マタイ一五ノ七、 イザヤ二九ノ一三
- 一七 夫婦一體  
マタイ一九ノ五、 創世記二ノ二四
- 一八 モーセ  
マタイ一九ノ八、 同二三ノ二
- 一九 聖書を知らざるにより謬れり  
マタイ二二ノ二九

- 二〇 律法と預言は此二の誠に因れり  
マタイ二二ノ四〇
- 二一 キリストにつき何と思ふか  
マタイ二六ノ四二―四五、 詩篇一一〇ノ一
- 二二 アベルの血よりザカリアの血まで  
マタイ二三ノ三六、 創世記四ノ八、 歴代志略下二四ノ二〇
- 二三 ダニエル書  
マタイ二四ノ一五、 ダニエル九ノ二七、 ダニエル一二ノ一一
- 二四 ノアの洪水  
マタイ二四ノ三八、 創世記六ノ三
- 二五 人の子録されたる如く逝かん  
マタイ二六ノ三四、 イザヤ五三章、 詩篇二二篇
- 二六 綿羊散らんと録されたり  
マタイ二六ノ三二、 ザカリヤ一三ノ七
- 二七 もし然せば預言者の録たる所に應へんや  
マタイ二六ノ五四、 イザヤ五三章
- 二八 我神何ぞ捨て給ふや  
マタイ一七ノ四六、 詩篇二二ノ一

### ヨハネ傳に於けるイエスの聖書の引照

- 一 聖書は我に就て證するもの也  
ヨハネ五ノ三九
- 二 預言者の書に人みな教を神に受けん  
ヨハネ六ノ四五、 イザヤ五四ノ一三
- 三 聖書に録した如く腹より活水  
ヨハネ七ノ三八、 イザヤ一二ノ三、 四四ノ三



- 四 二人證は眞也と津法に録す ヨハネ八ノ一七、申命記一七ノ六
- 五 聖書は破るべからず ヨハネ一〇ノ三五、詩篇八二ノ六
- 六 律法に汝等は神なりと録さる ヨハネ一〇ノ三四
- 七 聖書に我と偕にあるもの踵をあぐ ヨハネ一三ノ一八、詩篇四一ノ九
- 八 亡びの子亡ぶこれ聖書に應ふ ヨハネ一七ノ一二、詩篇一〇九ノ八
- 九 聖書にかなわせんため渴くと云へり ヨハネ一九ノ二八、詩篇六九ノ二

### ルカ傳のイエスの聖書の引照

—他の福音書になきもの—

- 一 イエス會堂にてイザヤ書を読む ルカ四ノ一七、イザヤ六ノ一
- 二 エリヤ時代の話 ルカ四ノ二五
- 三 ダビテの記事を未だ讀まざるか ルカ六ノ三、サムエル前二一ノ六
- 四 モーセと預言者にきかずば死より甦ることも無効 ルカ一六ノ三一
- 五 人の子に就て預言者の録しゝことは今逐げらるべし ルカ一八ノ三一

六 石叫ぶべし

ルカ一九ノ四〇、

ハバクツク二ノ一

七 これ刑罰の日にして録されたることみな逐げられん

八 山よ我上に倒れよ ルカ二一ノ二二、ダニエ九ノ二六、ザカリア一ノ一

九 青木と枯木を焼く ルカ二三ノ三〇、ホセヤ一〇ノ八

一〇 我魂を汝に托す ルカ二三ノ三一、エゼケル二〇ノ四七

一一 モーセより凡て預言者を始め聖書に於て己に就て解明せられたり 詩 篇三一ノ五

一二 モセの律法 預言の書、詩の書に録されたる我事につく凡ての言は必ず應ふべきは我と共に在し

時語れる所なり ルカ二四ノ四四

一三 聖書を語らせんとて其聰を啓き……録されたり ルカ二四ノ二五—四八

右を見ても、如何にイエスが舊約聖書に通曉してゐたか、判明すると思ふ。就中、モーセの五書中の申命記、預言書中のイザヤ書、詩の詩篇は、殆んど暗誦する許りに、  
 翫味熟讀してゐたらしい。



イエスの聖書に關する智識は、之を天才的だと稱しても敢て過賞ではない。

### 第三節 自己の發見

然らば聖書を読んで、イエスは果してその中から何物を發見したであらうか。

イエスの發見

- (一) 自己の發見
- (二) 神の發見
- (三) 新社會の法則の發見
- (四) 救の力の發見………である。

(一) 自己の發見——『この聖書は我につきて證するものなり』とイエスは云つてゐる。即ちイエスは聖書を読んで行く中に、自分の姿をマザ／＼と其處に發見した。即ちメシヤとしての自分を其處に發見したのである。(メシヤとは希臘語で「キリスト」

即ち油をぬられたもの、受膏者の意味である)

イエスは充分人間的な人間であつた。而も神を離れて、完全な人間はあり得ない。同時に、完全な人間にして、始めて神の子となり得るのである。イエスが眞に人間的であり、十分に人間的である事、其事が、イエスをして、自らメシヤとして發見するに至らしめたのであつた。

パウロは、人間に二種ありとし、一はアダムで、土地について亡び、二はイエスで、神の子として榮えたと云つてゐるか、イエスが神の子として榮えたのは、全くイエスが完全な人格であり得た結果に外ならない。

神とは、決して人格を脱却したものでなく、寧ろ十二分に、筒一杯に人格的であり得るものをいふ。我等は不幸にして、未だ人間の成り損ねである。イエスに於て、初めて人間らしき人間が完成した。

メシヤの出現

當時ユダヤ人はメシヤの出現を翹望してゐた。併しその期待する處



のメシヤは、謙遜な受難者としてではなく、横暴なローマの勢力を全ユダヤから放逐する爲めに、一大革命を起す、權威を以て臨むメシヤであつた。

ユダヤ人の考へは頗る物質的であつた。彼等はメシヤの現はるゝ時、國民が物質的にも解放されると考へてゐた。又彼等は、政教の一致を考へてゐた。故に祭司の長が王になる事を夢みた。

併しその事は實現するに至らず、徒らに現實曝露の悲哀を感じるのみであつた。茲に於て彼等の考へは精神的に變つた。彼等は未來にユートピアを想像した。夫れは一つのキヤタロスフエー（終末）の來る事であつた。歴史が一朝にして崩壊して、斷崖に臨んだ時、忽ち其處に君臨するメシヤのあるべきを豫想して。ユダヤ人は夫れを種々の形で求めてゐたのである。

ユダヤ人はそのメシヤの出現に當つて十の順序を経るものだと考へた。

(一) 苦難

(二) 先驅者エリヤの出現

(三) メシヤの出現

(四) 外敵の浸入

(五) エルサレムの回復

(六) 散在せるユダヤ人の歸郷

(七) パレスチナ王國の建設

(八) 萬物の勢力回復

(九) 死人の復活

(十) 最後の審判

斯くの如くユダヤ人は光榮ある未榮の淨土に憧れてゐたのである。

こうしたユダヤ人の心持は、種々の文學書にも現はれて居た。殊にエノック書 (Enoch Book) には人の子の出現が書かれてゐるが、その人の子が即ちメシヤである。



## ダニエル書のメシヤ

九〇

我また夜の異象の中に觀てありけるに人の子の如き者雲に乘りて來り日の老たる者の許に到りたればすなはちその前に導きけるに、之に權と榮と國とを賜ひて諸民族諸音をしてこれに事へしむその權は永遠の權にして移りさらず又その國は亡ぶることなし。(ダニエル書七章一三節)

受難の  
メシヤ

エノツク書にはその出現するメシヤは一大權威者であると記してゐる。ダニエル書に於ても然うである。然るにイザヤ書及び詩篇には之れと反對に、頗る謙遜な受難の人の子の出現を豫想してゐる。

## イザヤ書のメシヤ

かれは侮られて人にすてられ、悲哀の人にして病患をしれり、また面をおほひて避くることをせらるゝ者のごとく侮られたり、われらも彼をたふとまざりき、まことに彼はわれらの病患をおひ我濟のなほしみを擔へり、然るに我ら思へらく、彼はせめられ、神にうたれ苦しめらるるなりと、彼は我等のとのために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みづから懲罰をうけてわれらに平安をあたふ。そのうたれし疾によりてわれらは癒されたり。われらはみな羊のごとく迷ひておの／＼己が道にむかひゆけり、然

るにエホバはわれら凡ての者の不義をわれのうへに置き賜へり、彼は苦しめらるれどもみづから謙りて、口を開らせず、屠場にひかるゝ羔羊のごとく毛をきる者のまへにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき、かれは虐待と審判とによりて取去られたり、その代の人のうち誰か彼が活るもの地より絶れしとを思ひたりしや、彼はわが民のとのためにうたれしなり。その墓はあしき者と共に設けられたれど死る時は富める者と共になり、かれは暴をおこなはず、その口には虚偽なかりき、されどエホバは彼を碎くことをよろこびて之をなやまし給へり、斯てかれの靈魂とがの獻物をなすにいたらば、彼その末をみるを得その日は永からん、かつエホバの悦びたまふことは彼の手によりて榮ゆべし、かれは己がたましひの煩勞をみて心たらわん、わが義しき僕はその相識によりておほくの人を義とし、又かれらの不義をおほはん。このゆゑに我かれをして夫なるものとともに物をわかちとらしめん、かれは強きものとともに掠物をわかちとるべし、彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ、とがあるものと共に數へられたればなり、彼はおほくの人の罪をおひとがある者の爲にとりなしをなせり。(イザヤ書五十三章)

## 詩篇のメシヤ

わが神なんぞ我をすてたまふや、何なれは遠くはなれて我をすくはず、わが救きのことゑを聞き給はざるかすべて我を見るものはわれをあさみわらひ、口唇をそらし、首をふりていふ、かれはエホバによりたの



めり。エホバ助くべし、エホバかれを悦びたまふが故にたすくべしと。されど汝はわれを胎内よりだし給へるものなり、わが母のふところにありしとき、既になんちに依頼ましめたまへり、我生れいでしより汝にゆだねられたり、わが母われを生みしより、汝はわが神なり。われに遠ざかり賜ふなかれ、患難ちかづき又救ふものなければなり、おほくの牡牛のわれをめぐり、バサンの力つよき牧牛われをかこめり。かれらは口をあけて我にむかひ、物をかきさき吼うたぐ獅の如し、われ水のごとくそよぎいだされ、わがもろくの骨ははづれ、わが心は蠅の如く腹のうちに溶けたり、わが力かわきて陶器のくだけの如くわが舌は頸にひたつけり、なんぢわれを死の塵にふさせ賜へり、そは犬われをめぐりて悪しきもの、群われをかこみてわが手及びわが足をさしつらぬけり、わが骨ごとくく数ふるばかりになりぬ、悪しきもの目をとめて我を見る、彼らたがひにわが衣をわかち、わがしたぎを圖にす、エホバよ遠くはなれ居たまふなかれ、わが力はねがはくは速く來りてわれを援けたまへ、わがたましいを劔より助けいだし、わがいのちを犬のたけいきほひより脱れしめたまへ。(詩篇二十二篇)

右は全く受難者の標本とも云ふべきものである、イエスは、夫れが自分の姿と思ふものから、一々その通り、自ら實行した。

受難は、どの種の改造運動にも附きものである。ブラトーンの「理想共和國」にも、之が建設の爲めに、犠牲となるべき者の必要を説き、煩悶せる人が中心人物となつてゐる。此の受難者の必要が、詩人の心に解かつたのは興味ある事である。

二種のメシヤ

斯くの如く、同じメシヤにも、エノツクやダニエルの書いたメシヤ(權威的メシヤ)と、詩人の夢みたメシヤ(受難者メシヤ)とは非常なる懸隔があるのであつた。此の二つの流れは、イエスに至つて、初めて完全に一つのものに融合されたのである。

イエスは云つた。「汝等の内、人の首たらんとするものは先づ人に使はるゝ者となれ」と。即ちイエスは、權威ある者であるが、同時に受難者として現はるゝ者が、眞のメシヤであり、革命者だとの見解に達したのである。

牛津大學のチャールズ教授は「舊約と新約の中間時代に於ける宗教思想の發達」の中に於て此事を記してゐる。即ち「イザヤ書に出てゐるエホバの僕といふ思想と、



エノツク書に出て来る權威者としてのメシヤといふ思想は、イエスに依つて始めて人格化され、詩人の考へてゐた受難者としてのメシヤの思想が、之に融合し、完全な人の子として現はれたのである。』と。

イエスは聖書を読んで行く中に、此二つの流れ即ち(一)當時の人の望んでゐた未來淨土が、權威者の手で暴力的に出現するものとする流れと(二)神の子として、受難者として、神の國を作らんとする流れとを見、此の二つの流れを自分一つの人格の中に纏めて了つた。即ちイエスはエノツク書、イザヤ書、詩篇を読む裡、その記すところのメシヤが自分を指してゐるといふ事を發見したが、イエスは之等のものを綜合し、權力的王として、謙遜な神の僕として、又受難者として立つたのである。

メシヤの行動

夫れは當時のユダヤ人の期待してゐた者とは違つてゐた。其ために國民は迷ふた。彼等はイエスの磔刑になつた後まで、メシヤが權力者であるか、受難者であるかについて迷ふた。併しイエスだけは明瞭に

受難者として現はるべきものたる事を信じ、且つ自らがそのメシヤたる事を信じてゐた。

その證據に、イエスの採つた行動は、凡てイザヤ書その他に記されたメシヤの通るべき道その儘を踏んでゐる。今、マタイ、ヨハネ兩傳に現はれイエスの行動にして、イザヤ書その他に記載されたメシヤの行動と全く符合する箇所を擧げて見ると次の如くである。

マタイ傳に現はれたる聖書的メシヤ觀

- 1 預言者の言葉としてのメシヤ出生……マタイ傳一章二三節、イザヤ七章一四節
- 2 ベツレヘム……マタイ傳二章五節、ミカ五章二節
- 3 埃及行……マタイ傳二章一六節、エレミヤ三一章一五節
- 4 ナザレ人……マタイ傳二ノ二三節、士師一三ノ五、サムエル前一章一一節
- 5 野によべる人……マタイ傳三章三節、イザヤ四〇章三節
- 6 カペナウム居住……マタイ傳四章一四節、イザヤ九章一節



- 7 奇蹟(病人を癒す).....マタイ傳八章十七節、イザヤ九章一一節
- 8 来るべものは汝なるか.....マタイ傳一章一三節、民數記略二四章一七節
- 9 柔順なる神の僕.....マタイ傳二二章一七節、イザヤ四二章一節
- 10 譬にて語るメシヤ.....マタイ傳一三章三五節、詩篇七八章二節
- 11 驢馬に乗るメシヤ.....マタイ傳二二章四節、ザカリア九章九節
- 12 捕縛.....マタイ傳二六章五四節、哀歌四章一〇節
- 13 メシヤを賣すもの.....マタイ傳二七章九節、エレミヤ一一章一二節
- 14 値積られた銀(エレミヤとマタイの書い).....マタイ傳二七章九節、ザカリア一一章一二節
- 15 衣の籤.....マタイ傳二七章三五節、詩篇二十二節

ヨハネ傳に現はれたる聖書的メシヤ觀

- 1 熱心我を食はん.....ヨハネ傳二章一七節、詩篇六九節
- 2 録して骨一つだに折らず.....ヨハネ傳一九章三六節、詩篇三四章二〇節
- 3 録してイエスの死より蘇るべきを知らず.....ヨハネ傳二〇章九節、詩篇一六章一〇節

右の中でも第四のナザレ人といふのは、元來は「神に誓つた人」といふ意味なのだ  
 が、マタイ傳の作者は、イエスの生れた土地の名のナザレであるのを其儘當てはめて  
 居る。

又イエス自身も、イザヤの預言は全く自分の事を云つてゐるのだと確信し、メシヤ  
 が驢馬に乗るとあるを見て、イエスも亦入城の時驢馬に乗つた。  
 此の意味で新約、舊約は二つでなくして一つである。

イエスが受難者として自覺した時、彼は眞の権力者メシヤ以上の力を得たと考へた。  
 併し此場合にも閑却してならない事は、イエスが同時に「基督」(救世主の尊稱)であ  
 つたのは、イエスが十分人間の人間であつた爲めに、自らその自覺の域に這入つたの  
 だといふ事である。換言すれば彼は彼は権力的改造の以前に、先づ受難者としての小羊の  
 血祭をなし、それに依つて人類を救ふた事である。

ユダヤ教はイエスを信するが基督を信しない。イエスの磔刑以來、基督の信仰は異



邦人——アーン民族に移つた。十九世紀の批評家もイエスを基督と信じない。之に反し私達は、イエスが同時に基督であると信ずる。

それはさて置き、斯くの如く、イエスが自らの立場を讀書中に考へ、そして超自然の力が平凡な人間の中に交渉を保つた事を信じたのは、決して理窟ではない。それは聖書の生命を酌む者には容易に信じ得られる處である。

イエスは斯様にして聖書を讀んでゐる中に先づ自己を謙遜なメシヤとして發見したのである。

#### 第四節 神の發見



イエスは聖書を熟讀して、『父としての神』を發見した。そして自分がその愛せらるゝ獨り子たる事を發見した。

救とは神を發見する事である。神を發見する事に依り、碎けた靈を、

もう一度碎けざりし元の完全にかへす事である。絶縁體が今一度神にくつついて、自分にかへつて來る事である。要するに、失はれてゐた力が、モウ一度回復して來る事である。夫等の事は、自分の力だけでは出來ない。神に依つてその力を得るのである。聖靈に依り神に召され、自ら神の生活に入る事を信ずる事が、メシヤとしての自覺である。そして自分にある神の力が放射し、罪人の中に這人れば、罪人の救となる——

イエスはその力を自らの裡に經驗した。父なる神は、義なる神であり、慈悲深き神である。此等の事も、イエスは舊約に記されたと同じやうな譬話に依つて物語つてゐる。ヨハネ傳第十章にある羊飼の譬話はエゼケル書三十四章の羊飼の譬話と符合し、ルカ傳第十五章放蕩息子子の父の譬話は、ホゼヤ書の不良の妻を持つ夫の話と符合する。イザヤ書に現はれた自然の姿と、その自然の譬喩が、如何にイエスに影響してゐるかは、蓋し、我等の想像以上であらう。

イエスは、數千年間に圓熟したユダヤの宗教思想を、その讀書の裡に自分の中に吸



收し、溶解して更に吐出したのである。

眞	の
文	學

讀者は聖書を読んで、神の父たる事を先づ知らねばならぬ。神を離れた文學は讀むの價値がない。生命を基礎としない、神のない生活は空である。眞の文學は宗教的でなければならぬ。宗教が生命の工夫であり藝術である。

我等が、深く、強き生命を自ら體驗して、新舊約聖書を繙く時、強き電力にかゝつた如き力を感じる。歐洲の文藝復興も、サボナローラやダンテの強き生命宗教が先に走らねば來なかつたに違ひない。

ラスキンは『時代の美の爲め美を追ふのだ、と稱する模倣的な機械作業的のものは眞の美ではない。それは生命でなくて機械作業に過ぎぬ』と云つてゐる。

生命は成長する。潑刺として成長する。ベニスに残された文藝復興式の建築は凡て價値はない。夫れには宗教がないからである。之に反し、粗奔な北歐傳來のゴシック

式の摩天樓は美的である。夫れは自分の生命を投付けてゐるからである。即ち神を基礎としてゐるからである。

ダンテの友ジョットの畫に美のあつたのも夫れである。其處には神があり、生命があり、生命宗教があつた。今日の所謂文化生活も、生命に乏しく、宗教がないならば、夫れは單なる模倣にしか過ぎない。

### 第五節 新社會の發見

イエス
と
申命記

イエスの愛讀書は下に記す處の如く、種々あつた。その中にも申命記はイエスが愛讀したものの一つであつた。

申命記は原始的社會では、最も秀れた文献の一つである。夫れには、今日の社會政策以上の事が、三千年の昔に既に記されてゐる。(拙著「聖書社會學」第四節参照) イエスは之に依つて新社會の法則を發見したのである。申命記には次の如き驚くべき



事が記されてある。

### 廢娼及娼妓獻納品不受理法

イスラエルの女子の中に娼妓あるべからず、娼妓の得たる價及び狗の價を汝の神エホバの家に携へ入るべからず。何の誓願にも用ゆるべからず。(申命記二十三章十七、十八章)

絶對の廢娼を既に三千年前に唱へてゐた。斯る純潔なる法令が他に又とあらうか。

### 無産者主義

馬を多く得んとすべからず——又妻を多く其身にもちて心を迷はすべからず、又金銀を己れのために多く蓄ふべからず(申命記十七章十六—十七節)

今日の資本集積に反對し、多妻主義を攻撃して居るのは最も注意すべきことである。

### 金利全廢法

汝の兄弟より利息を取るべからず、即ち金の利息、食物の利息など凡て利息を生ずべき物の利息を取るべからず(申命記二十三章十九節)

之によつて資本主義の發達を防止し得たのだが、後プロテスタントが此法を捨てた爲めに、世界は拾收すべからざるものとなつた。之で見れば、今日のギルド社會主義も、畢竟、申命記の回復に過ぎない。

### 新夫婦優待法

人新に妻を娶りたる時は之を軍に出すべからず、又何の職務をも之に任すべからず、その人は一年家に間居して其娶れる妻を慰むべし。(申命記二十四章五節)

歐洲戰亂中、各國が人口の減少を慮り、戰時中にも結婚を奨励し、結婚者を戦線から歸還せしめたのも、畢竟、此法の復活である。

### 日傭賃當日拂法

憐める貧しき傭人は、汝の兄弟にもあれ、又は汝の地にて汝の門の内に寄寓する他國人にもあれ、之を虐ぐべからず。當日に之が値を拂ふべし、日の入りまで延すべからず。(申命記二十四章十四節)

何といふ親切な法であらう、奴隷の心持を知つてゐればこそ、此規定が出来たので



ある。

エレミヤは申命記の改革を企て、失敗した。ネヘミヤはそれに突進した。イエスは悪魔に會つた場合にも、申命記を楯として之を退けた。

併し此の立派な社會的法則も餘りに表面的であつた。

イエスは受難者の立場から、此の法則を綺麗に置替へた。イエスの

山上の垂訓は夫れである、



山上垂訓は、申命記を一段と進めた新社會の法則である。イエスは表面的な法則を、内側から來る處の神の力に置き替へた。シユワイツエルは之を中間道徳 (Ethics of Interim) と呼んでゐる。

ロシアでも、レニンは『自分が專制者として立つのは、新舊社會の中間に立つた爲めである』といつてゐるが、イエスは舊社會から新社會へ移る道徳として、恐從の徳を高唱した。即ち神が自分を通じて働くから、自分は積極的に入る要はないといふの

である。

絶對的無抵抗主義は、自ら努力するよりも、神を動かすに如かず——との考へ方から出發してゐる。即ち神の干渉を道徳の基礎としたのである。私が無抵抗愛を説くのも、全く夫れで、人間の力のみを以てしては無抵抗主義はあり得ない。

トルストイは『神は必ず仇を報いる』といつてゐるが、それを信じなければ誰だつて抵抗する筈である。神の力の方が、我等の力よりも強大なるが故に、神に委ねるのである。

愛と、正義と、忍從の道を守る者は、必ず捷つ。それは過去何千年の歴史が示す處の、歸納的事實である。ローマが亡びて、基督が勝つたのもそれである。

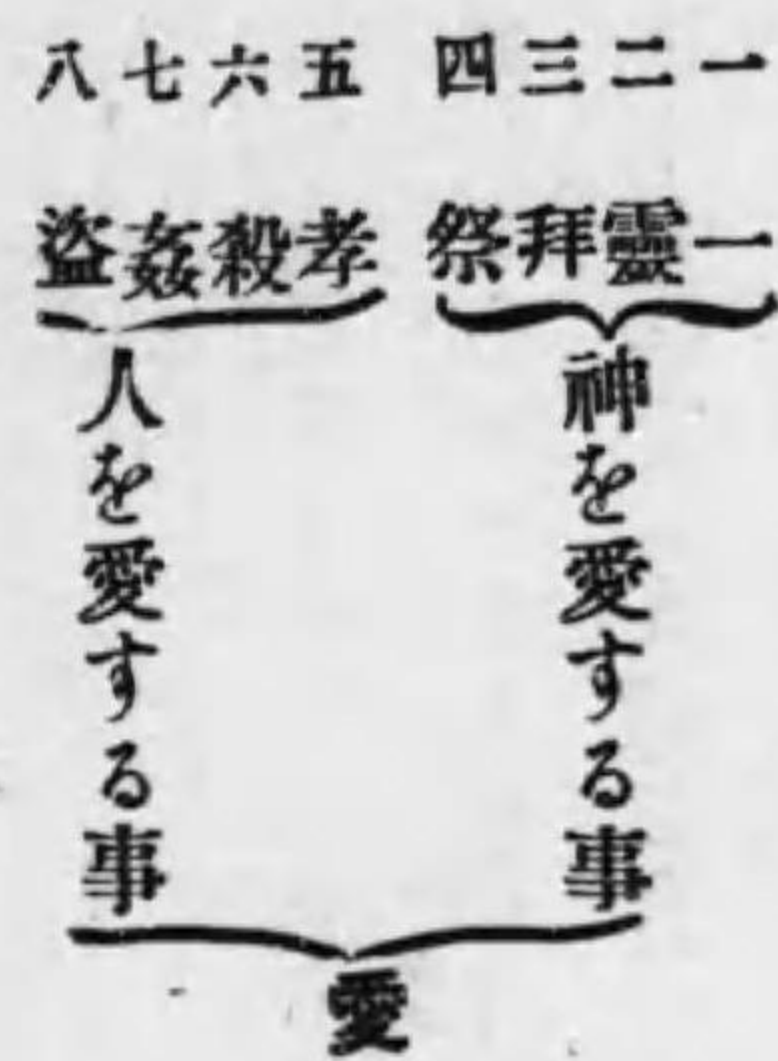
神は罪人をさへ救ふ。救ひがなければ抵抗しなければ損である。此の救ひの立場から、我等は暴力を否定するものである。此の救ひといふ立場、中間道徳の心持がイエスの山上の垂訓に現はれてゐる。



イエスの愛の道徳は自分が神に愛されて居るから、人を愛するといふのである。新社會の法則は、神を基礎とする愛の社會の建設を基調とするものでなければならぬ。之れイエスが聖書を—殊に申命記等を—通して発見した第二のものである。

十戒  
の一括

イエスは又、申命記から得た處のものに依つて、モーヒの十戒を一つのものに纏めた、即ち十戒の初め四つは、申命記に依れば神を愛する事となり、後六つは人を愛する事となる。イエスは此の二つを更に一つに纏めて、凡ての道徳が愛の一字に納まる事を説いたのである。



### 十九 貪僞

此の二段の取纏め方は、明かにマタイ傳及ヨハネ傳に現はれてゐる。

二つの戒め……………(マタイ傳二三章三六—四〇節)

一つの戒め……………(ヨハネ傳十三章三四—三五節)

即ちイエスが聖書を讀んで発見した處に基き新しき社會的法則として採らねばならぬとしたものは、モーセの如く長いものでなく、『愛』の一字であつた。

### 第六節 救の力の發見

救の法の發見

イエスはイザヤ書や詩篇を讀んで、其處に流れる救の力を發見した。即ちぎごちない因習の力が碎かれて、神の力が代つて流れ入り、腐敗した民族の更生する信仰を得たのであつた。更生の力が救ひの力



である。

イエスは其の救の力を、自分自身も持つてゐる事を信じた。イエスが過越節の祝宴で、パンを割き、葡萄酒を分つたあの新約の起源となつた時の記述を読む時、我等はイエスカ過越の舊約を——イスラエル民族が奴隸から解放された夜、ヒソツプで羊の血を戸口に塗つて救はれたと同じ事を——その儘してゐるのだなと感ぜざるを得ない。舊約は物質的の救ひだつたのを、イエスの新約は精神的の救ひとした。イエスは真理の爲めには、舊約に敢てヒケを取らなかつたのである。

イエスは、始めての人間として自分を現はし、十分人間的な人間として、又自らをメシヤとし、聖靈の力で人類を救ふた。

神の血	清注射
-----	-----

今日人間の靈肉は共に腐つてゐる。我等の中には、梅毒性や、姦淫や、罪惡の血が膿となつて潜んでゐる。血清注射が必要だ。神の六百

六號を注射しなければ駄目だ。清く、優れた神の干渉がなければ我等は此儘腐つて了ふ。

イエスはその讀書に依つて、救の法則を發見したのであつた。



第三章 イエスの感情



イエス涙を流し給へり。

——ヨハネ傳十一章三十五節——

### 第三章 イエスの感情

#### 第一節 イエスの悲哀

第	感
一	情

東洋人には感情を卑しむ風がある。感情に動かさるゝ者は、偉人たるの資格がないとさへ考へる。併し、近世の心理學者は、人間の最も主要なる部分は、感情と意志とで、知識は情意の赴く儘に變つて行くのだと言ふ。ジエームスの如きも「智は情意に依り支配せらる」との學説を立てゝゐるほどである。

我等が信せんとする場合にも、理窟一點張りでは迎ても駄目である。我等の知識が



知つてゐる宇宙の組立は、ホンの一部分に過ぎない。その小部分の宇宙の組立を知る事が、決して信仰に入る前提とはならない。それよりも信せざるを得ざる、又愛せざるを得ざる感情を持つ事が第一である。故に感情を捨てねばならぬとする印度的の見方は、未だ眞の見方とは言ひ難い。

又、宗教心理学の上から言つても、感情は意志、知識の上に置かるべきものである。故にイエスの研究をなすに當つては、先づイエスの感情を十分に檢べる必要がある。

生	命
醫	術

感情を研究するに當つては、先づ、イエスの宗教の本質を知らねばならない。一般に宗教といふものが、我等の日常生活から遙かに離れた、特段なるものゝ如く考へるのは誤謬である。生命の中に體驗される生きんとする工夫が即ち宗教である。従つて誤れる感情を醇化し、美しき感情を生命の中に構成するものが宗教である。換言すれば、感情夫れ自身を、最も美しきものとする生命藝術——夫れが宗教である。

即ち感情は、知識よりも遙か底深く根ざす處のものである。知識が我等の眼、耳、鼻、舌、皮膚等の感覺から結合されるに反し、感情は全生、全身、全靈から發する。故に我等若し人を見んとせば、その感情を見るに如くはないのである。

私はイエスの感情を調べるに當つて何等の前提を置かない。如實のイエスの感情を如實に見やうと思ふ。

暗	影	の
イ	エ	ス

イエスは一般世間から「悲哀の人」として見られてゐる。それは苦難の表象としての十字架が示す處である。然り、イエスには暗影が附纏ふた。夫れは當時のユダヤの情勢が投影したものである。

### 暗影のイエス

あゝ信なき曲れる世なる哉、われ何時まで汝らと偕にをりて汝を忍ばん。(ルカ傳九章四十一節)

或人は宗教感情の第一は「厭世主義」であるといふ。獨逸のオイケンの如きも『宗教の本質の一つは厭世主義にあり』といひ、曲れる世を否定してかゝる事が、宗教本能



の第一であり、表面的機械的の考へ方から離れて超越した考へ方を考へるのが、宗教の本質だと言つてゐる。

成るほど、イエスはヘロデ王朝の曲政、及びローマ皇常の虐政を見て『曲れる世なる哉』と叫んだ。之れは一見厭世の如くではあるが、併し、決して印度の學者の考へる如き厭世でない事を注意しなければならない。

曲れる世

イエスの曲れる世と言へるは、全然世を否定するのではなく、二つの道の一方を行けば、神の國に入る事の出来るのに、人は夫れと知らずに、他の迷路に這入つて行くのを嘆いて「曲れる世」と言つたのである。換言すれば、人々が誤れるコースをとつたのを見て嘆いたので、謂はゞ「撰擇」の錯誤を嗟嘆したのである。故にプラマ教などの如く、生命夫れ自身を否定するものとは明かに區別さるべきである。

斯の如き意味に於て、イエスには暗い心持のあつた事は否定する事が出来ない。

イエスの「世」(the world)と言つたのは、盲目的、表面的、物質的、機械的の心持を指したのである。イエスはその「世」が審判に會ふべき日の來る事を言つてゐる。

哭き切齒することあらん

御國の子らは外の幽暗に逐れてそこには哀哭切齒する事あらん(マタイ傳八章十二節)  
之を烈しく咎ちその報を偽善者と同じうせん、其處には哀哭切齒することあらん。(マタイ傳第二十四章五十一節)  
然して地の無益なる僕を外の暗黒に逐ひ出せ其處にて哀哭切齒することあらん。(マタイ傳第二十五章三十節)

そうした世の中に生れ合したイエスだから、自ら其處には寂莫があつた。

第二節 イエスの寂莫

十九世紀の初めまで、人々はイエスを見る事、恰かも半神の天使の如くであつた。その時、突然進化論が現はれて、その迷夢を醒した爲め、當時の教會内に一脈の寂莫の感じが流れ込んだ。そして發明的な心持

イエスの孤獨



が流入すると共に教會は頓に疑惑的となつた。

フレデリック・ロバートソンは、始めて「イエスの孤獨」と題する説教を試み、人々を驚かした。イエスは眞に孤獨であつた。機械文明の發達と共に、信仰の道にも悲哀があつた。フレデリック・ロバートソンはその悲哀を知つて居たのである。

當時のローマは、今日と共通點が甚だ少くなかつた。先づ地中海の文明國が始めて統一された。それは今日の國際聯盟に髣髴としてゐる。ローマ皇帝は掠奪を恣にし、思ふ儘に人間を料理した。八頭立の馬車は、今日の急行列車の約四分の一の速力を持つてゐた。『世界の凡ての道はローマに通ず』といはれるまでに土木事業は發達した。巨船が作られた。パウロが便乗した汽船アドミラル號は、二千噸の巨船だつたといふ。かくの如く文物は進歩發達を見たが、それは、靈の添はぬ金殿玉樓に過ぎなかつた。富の増加と共に金持は愈々腐つて行つた。此の感情は何時しかローマ全體を席捲し、ユダヤにまで浸入しやうとした。裸體操が流行り出した。ストイック的なユダヤ人が

驚いて『曲れる世なる哉』と嗟嘆したのは理の當然である。

妥協を  
排す

斯くしてイエスには寂莫があつた。彼は獨り人なき處に居た事もあつた。(マカ傳一章四十五節) 強て弟子を船に乗せ獨り山に上つて行つた事もあつた。(マカ傳六章四十五節) 寂しき所に休めと教へた事もあつた。

(マカ傳六章三十一節) 又一人放浪の旅にあつて、人の子は枕する所なしと嗟嘆した事もあつた。(ルカ傳九章五十八節) 棄てられしイエスは (ヨハネ傳十二章四十九節) 我一人を殘さんと訴へ (ヨハネ傳十六章三十三節) 預言者は故郷に重せられずと悲しみ (ルカ傳四章二十四節) 隠れることにつとめた。(ルカ傳七章二十三節、ヨハネ傳七章十四節、同八章五十九節、同十章三十九節、同十一章五十四節、同十二章三十六節) 之を見ても、イエスの寂莫が窺はれる。

イエスの此の寂莫は彼が眞摯であつた反影に外ならない。昔伯夷叔齊は世に容れられずして、山に隠れて餓死した。イエスは其處まで厭世的ではなかつたが、彼が世と妥協せずに進む處に寂莫があつた。



或る越後の代議士は立候補をする便宜上、自分が基督者でない事を寺院に廣告して、世と妥協したといふ。併しイエスは断じてそんな妥協をしなかつた。従つて其處には常に苦難がイエスを待つてゐた。イエスはその苦難の來るべきを豫め知つてゐた

苦難のイエス

斯て人の子の必ず多くの苦難をうけ、長老、祭司長、學者らに棄てられ且つ殺され三日の後に甦へるべき事を教へ此事をあらはに語り給ふ。(ルカ傳八章三十一節)

それにも拘はらずイエスは敢然として之に猛進した。其處にはイエスの悲哀がなげればならない。

イエス  
泣く

イエスは二度泣いた。その一度は愛弟子ベタニヤのマリヤの弟ラザロの死んだ時(ヨハネ傳十一章)その二度目は聖都エルサレムが、神の罰を受けて全滅するのを、橄欖山の上から眺めた時で、イエスは潸然として涙の下るのを覺えたのである。

又此外イエスは殆んど泣く許りになつた事が四度もある。即ち

イエス心憂ひ.....ヨハネ傳十三章二十一節

同.....十二章二十七節

憂ひて死ぬ許りなり.....マタイ傳二十六章五十六節

我神我神何ぞ我を捨て給ふや.....マコ傳十五章三十四節

特に第四項はイエスが十字架につけられた後、第四番目に發した言葉であるが、之を東洋的に考へると、その最後に近づいて悲しむなどは卑怯だ。女々しいと笑ふかも知れない。併しイエスにあつては、自分の持つ處の感情を隠さない。寧ろその全部を肯定してゐる。之はイエスの偉大な處である。

イエスは、悲哀を逃避しなかつた。強く生きるものに取つては、悲哀は生命の上に描かれた一の戯曲である。彼は悲哀を越えて、強く生きる事を知るが故に、敢て之を逃避しないのであつた。



悲劇の出生

てゐる)

多くの人は悲劇を逃避したいのが本能である。併しイエスは之を乗切つた。イエスの宗教は、イエスをして悲劇をも乗切らしめたのである。

神は、何故人の内に悲哀を作り給ふたか、それは神が同時に、悲哀の上を乗切る處の生命の道を作り置き給ふたからである。然うだ。強く生きる力を神より得てゐる者にとつては、悲哀は美しい演劇に過ぎない。

人は何故芝居を見る事を好むか。其處には多くの涙を誘ふ悲劇が上演されるといふのに、大金を投じて觀劇に行く。涙の値ひとして六七圓を此方から支出しても、尙ほ芝居に行く。それは悲哀を通じて變化を求むる爲めであり、又強く生きる力があつて、

幸福はほんのりや  
不幸はほんのりや  
人生はほんのりや  
死はほんのりや  
愛はほんのりや  
恨はほんのりや  
涙はほんのりや  
笑はほんのりや  
涙はほんのりや  
笑はほんのりや

悲しみをも觀照し得る餘裕を存するからである。

希臘人は悲劇を完成した。我等も亦大きな「悲劇の出生」を完成しなければならぬ。

イエスは強く生きる力を持つてゐた。さればこそ、苦惱、悲哀を越え、その全部を其儘に受け、遂に十字架をも我身に體驗した。我等の宗教は悲哀、死、苦難、迫害、攻撃を越えて生きるものでなくてはならない。之れが眞の救の道であり、又再生の道である。

パウロは「汝等はキリストのために、啻に彼を信する事のみならず、又彼のために苦しむ事をも賜りたり」(ペリピ書第一章二十九節)と言へて、神の恵は信仰の賜物の外に、苦惱の賜物のある事を教へてゐるが、實際、苦難を忍び得ないやうな者は、最初よりイエスの弟子となる志を持たぬが善い。

イエスは悲哀を敢然として受けた。其處に強い「悲劇の出生」がある。

妻の死に面しても象牙の面のやうに微動だにせぬのが英雄だとする考へは誤りであ



る。英雄とは悲哀、苦難を受けて更に伸上る事の出来る力を持つ者の名でなくてはならない。佛教の大乗といふのが夫れである。大乗とは「空」を越えて表現に生きること、即ち體驗の凡てを如實に受取る事である。イエスの教は、哲人の最も徹底した部分といふべきである。斯うした悲哀を知る人にして始めて眞の喜悅を知る。

### 第二節 イエスの喜悅

わ	が
喜	悅

イエスは眞の喜悅を知つてゐた。ルカ傳にも『イエス聖靈によりて喜びて言ひ給ふ』(第十章二十一節)とあり、又ヨハネ傳にも『我これらの事を語りたるは、我が喜悅びの汝らに在り、且つ汝らの喜悅の歸されんためなり』(十五章十一節)とあるのでも判明しやう。

更にイエスが磔刑にかゝる前の祈の中にも『此等のことを世に在りて語るは我が喜

悅を彼らに全からしめん爲なり』(ヨハネ傳十七章十三節)と言つて居る。そしてイエスは迫害があつても、夫れは天に於て償が多いから喜び樂めと教えてゐる。(マタイ傳五章十二節)

ベルグソンは、その「笑の研究」の中で、主としてモリエールの喜劇の笑を研究して『笑とは精神的のものが、物質の世界に投付けられたものだ』と言つてゐる。併し最近の心理學から見ると、笑は既に生後六日頃の小供にも準備されてゐるもので、本能的のものであるといふ事に一致してゐる。

我々の嬉しいのは、我等の身體にある筋肉が動くからである。人間は本能的に動きさへすれば其處に笑が来る。下世話に「笑ふ門に福来る」といふのは、畢竟、笑ふから福が来るのではなくて、身體が健全に發育して居て、本質的に笑へるから、其處に福が来るのである。

尤も、今日の如き表面的な世の中に於ては、眞に笑ふ時はないが、

生	命
喜	悅



是を脱却するに於ては、笑へる時の來るといふ事を説いて、イエスは『幸福なる哉今泣く者よ汝ら笑ふ事を得ん』と言つてゐる。我等は表面的の笑を捨て、此の眞の笑を笑ふ爲めに、眞理の道を辿らねばならぬ。それが福音である。それでイエスは自分の教を福音といつた。

福音を信ぜよ

時は満てり神の國は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ。(マカ傳第一章十五節)

イエスの右の教は四段に分解する事が出来る。即ち、

時の發達……………(歴史)……………時は満てり

神の國の接近……………(新社會)……………神の國は近づけり

更生……………(手段)……………汝ら悔改めて

生命の喜悅……………(喜悅)……………福音を信ぜよ

今日の人々の墮落するのは、全く生命の悦びを内に持たぬからである。福音とは生

命の神の喜悅に外ならない。我等は先づこの福音を信じなければならぬ。

福音を説くイエス

「主の御靈われに在す。これ我に油を注ぎて貧しき者に宣べしめ、我を遣はして囚人に赦を得ること、盲人に見ゆることを告げしめ、壓へらるる者を放ちて自由を興へしめ、主の喜ばしき年を宣傳へしめ給ふなり。」(イザヤ書) (ルカ傳第四章十八節)

イエスは此の神の喜悅の福音を、結婚式になぞらへてゐる。

新しき酒と革囊

イエス言ひたまふ「新郎の友だち、新郎と偕に居る間は、悲しむことを得んや。されど新郎をとらるる日きたらん、その時に斷食せん。誰も新しき布の裂を舊き衣につぐことは爲じ、補ひたる裂は、その衣をやぶりて、破綻さらに甚だしかるべし、また新しき葡萄酒をふるき革囊に入ることとは爲じ、もし然せば囊はりさけ酒ほとばしり出でて囊もまた廢らん。新しき葡萄酒は新しき革囊にいれよ、斯て兩ながら保つなり。(マタイ傳九章十五—十七節)



喜	悦
の	道

華やかな心持——之れがイエスの宗教である。特段なる厭世の道を教へ、斷食を教へる事は、イエスの探らざる處である。即ちイエスの教は、その儘で喜悅の道に入る事の出来る更改の道を教へたのである。『神よ罪を赦し給へ』とのみ繰返すが、夫れはイエスの宗教の半面を知らぬものである。イエスの教への半面に、雪の下に芽生へた若芽が、陽春に會つて、地殻を破つて出る生命の蘇生のある事を知らねば、未だ眞のイエスの教を知れりとは言へない。我等は機械的、因習的の衣を脱いで、イエスを通じ、再び神に來らねばならない。福音は此處にある。そして其處にこそ眞の喜悅がある。

#### 第四節 眞面目なるイエス

イエスは常に緊張してゐた。イエスは常に目を醒し、且つ祈れと言ひ、(マタイ傳第二

十六章四十一節) 怠らずして守れ (マタイ傳第十四章四十二節、同二十五章十三節) と言つたほど、夫れほど常に緊張して居た。そしてイエスは弟子を選ぶ時にも徹夜して祈るほどだつた。

厳	しく
戒	しむ

イエスは終始眞面目であつた。だから自分の名聲の高くなる事を厭ふて、常に評判を立てるものを押し止めた。

イエスが己れをキリストだと言ひ、メシヤだといふ者に對して『言ふな』と戒めたことが聖書に數回も出てゐる。

#### イエス戒む

- 癩病人を厳しく戒む.....マカ傳第一章四二節
- 鬼を厳しく戒む.....マカ傳第三章十二節
- ヤイロの一族に人に知らすなと厳しく戒む.....マカ傳第五章四十三節
- 婢を戒む.....マカ傳第七章二十六節
- 村に入るなと盲者を戒む.....マカ傳第八章二十六節
- 弟子にキリストと云ふなと戒む.....マカ傳第八章三十節



實際イエスの宗教は奇蹟的に弘まつた。併し夫れはイエスが奇蹟を行ひ、人心を集めて弘めたのでは決してなかつた。イエスは寧ろ奇蹟を行ふ事を手控へた。それはイエスの教の中心が、神の力の體驗、神人の接觸にあつて、奇蹟になかつたからである。イエスはその宗教の本質を失はざらんが爲めに、種々と評判を立てやうとする者を戒めた。併し或者はそれにも拘らず、イエスを廣告した。その爲めにイエスは至る所、人々の殺倒するに會ふて、うか／＼と町にも這入れなかつた。(マカ傳一章四十五節)

人間性の醜さ

トーマス・カーライルは近世の戯曲的歴史家として聞えた人だが、彼は歴史的に人間性の醜さを知つて、我々に對し、泌々と生命の本質から突進すべき事の必要を高潮してゐる。彼は prophet of sincerity と呼ばれたほど、人間の上調子な部分を嫌忌した。

又我等が佛國革命史を讀む時、ルイ十五、十六世の没落の場景は、人事とは思はれない。凡てが我等の現實を暴露してゐるものとよりしか考へられず、魂をさゝれる思

ひがする。

彼の榮華と權威を矜つたルイ十五世の最後は如何なりしぞ。彼が傳染病に罹つて死骸となつても、之を葬る者なく、臭氣さへ發し、一公爵は鼻をつまんでその屍に近づいて行つたといふではないか、世は偽善の塊りでなくして何であらう。

併し、夫れは獨りルイの末路でなくして、我等の現實である。高い名聲は、懸て廣告の颯風の中から墜落させられるであらう。イエスは此の名利を求めず、只管、自分の道を辿つた。我等は此のイエスの眞面目を學ばねばならない。

世人は『宗教の缺點はゴマカシにある』と言ふ。私達はゴマカシのない心持で、眞面目に生命の道を辿らねばならない。

自然主義の、罪の誇張は好ましくないが、全部を摘發する心持は甚だ好ましい。トルストイやオーガスチンの懺悔録は、今も生命のある書として讀まれる。我等も醜を醜として、神の前に展開する心持がなくてはならない。そして世の毀譽褒貶に關する



處なく、ゴマカシのない真面目な生活を送らねばならない。

イエスは斯うした真面目な人であつたから、屢々弟子を叱咤した。

叱責するイエス

イエスの叱責

マカ傳第八章三十三節

弟子の心頑きと信なきを責め給へり……………マカ傳第十六章一四節

村々の悔改めざるにより責めて……………マタイ傳第十一章二〇節

イエス悪鬼を責む……………ルカ傳第四章五十五節

弟子を戒む……………マカ傳第八章十五節

右の最後の場合の如き、イエスは最も強く叱責してゐる。即ちイエスが七つのパンで四千人に與ふる奇蹟を行つたその恵みに忤れて、弟子達が辨當の用意をして來なかつたのを見、イエスが叱つたのである。『未だ知らぬか、悟らぬか、汝らの心なほ鈍きか、目ありて見ぬか、耳ありて聽かぬか、又なんぢ思ひ出でぬか』と。弟子達を叱責するイエスの面目の髣髴たるものがあるではないか。

更に、イエスは怒氣を含んで叱責した事さへあつた。安息日に會堂で手なへたる人を癒さんとして、人々の反對に會つた時（マカ傳第三章五節）又弟子達が嬰兒をイエスの許に連れ來れるを押し止めた時（マカ傳十章十節）イエスは怒りを含んで叱つた。

併し之等のイエスの叱責若くは憤怒は、何れも理由あつての事で、故なくして怒る事は、イエスも之を誡めてゐる。

故なくして兄弟を怒るな……………マタイ傳第五章二十二節

嚴格な  
イエス

斯くの如く、イエスは頗る嚴格であつた。だから弟子達はイエスを怖れて、或場合には、おどくとして、イエスに問を發する事すら怖れ、或場合には言葉もなく黙々としてイエスの後に従つて行くやうな

事もあつた。

弟子恐る

弟子問ふことを恐れたり……………マカ傳第九章卅二節



弟子恐れて従へり……………マカ傳第十章十二節

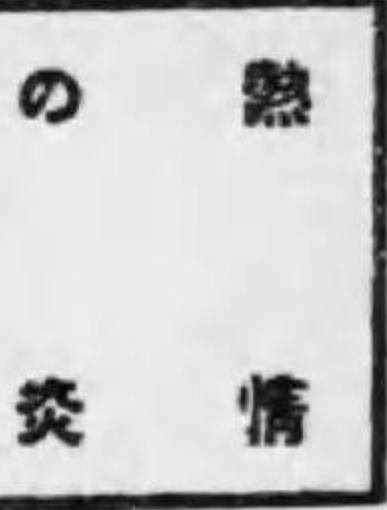
イエスは又興奮して、その言葉に感嘆詞を用ひ詠嘆し、慨嘆する事もあつた。

詠嘆せるイエス

- あゝ、腹の裔よ、パリサイ人よ……………マタイ傳第十二章三十五節
- あゝ、禍なるかなパリサイ人よ……………マタイ傳二十三章十三節
- あゝ、エルサレムよ……………マタイ傳第二十三章三十七節
- あゝ、信なき世なるかな……………ルカ傳第九章四十一節
- あゝ、禍なるかなベテサイダよ……………ルカ傳第一〇章十三節
- あゝ、信仰薄きものよ……………ルカ傳第十二章二十八節

興奮して發した之等の言葉は、不用意の裡に作られた一の散文詩である。

第五節 熱情のイエス、冷靜のイエス



イエスは眞に熱情の人であつた。イエスは嘗て弟子に向つてコンナ事を言つてゐる。

火を投ぜんとて來れり

我は火を地に投ぜんとて來れり、此の火既に燃えたらんには我は何をか望まん……………(ルカ傳第十二章四十九節)

イエスは熱情の炎を以て、此の世を改造しやうとしたのであつた。

イエスは斯うした熱情の人だから、又人の熱情に對して、理解と同情を持つて居た。當時の人から卑められてゐた醜業婦の一人が、火の如き熱情を以て、イエスの膝下に跪き、値高き膏をイエスに注いだ時も、イエスは咎めずに夫れを受けた。(マタイ傳二十六章六節)

此の熱情のメシヤは、又同時に宮を穢す商人を追ひ、牛馬を宮より逐出し、兩替所の臺を仆す處の熱情を持つてゐた。(ヨハネ傳第二章十五節、ルカ傳十九章四十五節) イエスは最も



熱情的な預言者であつた。

或人は言ふ『真理は熱心の排除した場合、真理にならぬ』と。電氣王エヂソンが電氣を發明したのは、十一萬回の試験の後であつた。改造運動も熱がなければ成功せず、真理は運行されない。

イエスは『熱心その身を食へり』と言はれるまで熱心であつた。(ヨハネ傳第二章十七節) 又『神の如き熱心』(コリント後書第十一章二節)をもつてゐた。

熱情の人であつた丈けに、イエスは又世の非、人の非徳を見ては嘆息した。或時は「天を仰いで歎じ」(マコ傳第七章三十四節) 又或時は「心の中に深く嘆息した」(マカ傳第八章十二節)

平 靜 の  
イ エ ス

併し、コウした熱情の持主であるが、イエスは又一面その靈の奥底に、鏡の如き平靜を藏してゐた。

イエスは暴風雨の中に於ても尙且つ眠つた。(マカ傳第四章三十九節) 又人

の兒の死んだ時も『何ぞ騒ぎ立つや』と戒めてゐる。(マカ傳第五章三十九節) 又イエスが審判所に引出された時も、少しも騒がなかつた。そして總督が『汝はユダヤの王なるか』と問ふた時イエスは『なんぢの言ふ如し』と明言し、祭司長や長老の訴へには一言も答へなかつた。

或哲人は『雄辯は銀! 沈黙は金!』といつた。然うだ。神は天地開闢以來未だ物を言はない。イエスは權威者ピラトの前にも、神と同じ沈黙の金を守つた。その沈着な態度は我等の學ぶべき點である。

イエスは沈着な態度を採つたと同時に、平安の所有者であつた。

イエスは人の家へ行つても、先づ『平安その家にあらん事を』祈れと教へ(マタイ傳第十章十三節) 又、人々に對しては『汝等平安なれ』(Be peace unto you)と祝福してゐるのであつた(ルカ傳第廿四章三十六章) 彼の最後の晚餐の席上でも弟子に對し

平安を汝らに遺す



われ平安を汝らに遺す、わが平安を汝らに與ふ、わが與ふるは世の與ふる如くならず、汝ら心を騒す  
な、又懼るゝな。(ヨハネ傳第十四章廿七節)

と教えてゐる。

今日の人は、一から十までの數字の勘定に心をせかれて、心に寸毫の平安も持たない。彼等の多くは利子發生機 (interest-making machine) に外ならない。彼等の血管の中には、暴風雨の絶えた事なく、常に低氣壓が心臓から頭へと往來してゐる。平安は金では買へない。

私は大正十年の夏、神戸の勞働爭議の渦中にあつても、獨り平安であり得たのは、全く神の與へ給ふ平安があつたからである。私は爭議の示威行列の中にあつて、眼を  
開いた儘祈つてゐた。

恐れなき  
イエス

印度の哲人ガンヂーは、此の平安の所有者である。彼はブラマ教と、ラスキンと、トルストイとを三者合金した如き思想を有し、生命の實

現といふ哲學を唱道し、靜かな「真理の把持」を高潮してゐるが、此の心の平安があればこそ、三億の印度人と共に、大英國に對して反抗する事が出来るのである。

真理は常に最大の平安である。イエスは其の平安な真理であつた。

従つて、イエスは毫末の恐怖といふものを持たなかつた。海上にあつても『心安かれ懼るな』と、恐れ戦く人々を押鎮め(マカ傳第六章五節) 又『小さき群よ懼るゝ勿れ父は國を與へ給はん』と教へてゐるのである。(ルカ傳第十二章三十二節)

又イエスは

刃を怖るゝな

身を殺して靈魂を殺し得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者を怖れよ。(マタイ傳

第一章廿八節)

と教へてゐる。然うだ。刃が何で怖い。靈魂と真理は、刃では殺せない。斯く平安を持ち、恐怖なきイエスは、一面に於て諧謔を解した。



イエスの  
諸諺

一體日本人は諸諺を持たない。殊に日本の女性には諸諺を解しない。私の一友人は某婦人雑誌から『あなたはドンナ奥様を貰ひたいとお考へですか』との質問を寄せられて『洒落の解かる女』と回答したそうだが、今日の若い婦人には、洒落を解し得る者が頗る少い。

英國人は上品な諸諺を知つてゐる。米國人は變化のある諸諺を言ふ。併し日本人の諸諺は「彌次郎兵衛、喜多八」の域を脱しない。

新しい時代の來る前には、必ず大きな諸諺文學が世に生れる。ソクラテスの理想がアゼンスに實行されやうとした時、アリストファネスの「蛙」「雲」など、題する諸諺劇がものされ、ローマの亡びんとする時には、ルシアンLucianの偶像禮拜を罵つた作物が現はれた。又中世紀の終末頃になつては、武士階級を滑稽に罵つたサーバンテスの彼の有名な「ドンキホーテ」が世に出で、佛蘭西革命の前には、ヴォールテールが哲學的諸諺を弄した「カンダイタ」等が出版されて、罵倒された王自らも之を愛讀したと

言はれる。此種の諸諺は最も意味が深い。

イエスはその弟子に雷の子、岩の子などといふ綽名をつけている（マカ傳三章十六節）。又種々な諸諺の勝つた譬を引いて人々を教へてゐる場合が少くない。最もニーモアの富んだものを擧げると次の如きものがある。

駱駝と針の穴

復なんぢらに告ぐ、富める者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた反つて易し。ペマタイ傳十九章二十三節。

七つの靈

穢れし靈、人を出づる時は、水なき處を巡りて、休を求む。されど得ずして言ふ「わが出てし家に歸らん」歸りて其の家の掃き淨められ、飾られるを見、遂に往きて己よりも悪しき他の七つの靈を連れきたり、共に入りて此處に住む。さればその人の後の狀は、前よりも悪しくなるなり。ヘルカ傳第十一章二十四節以下。



蝮と駱駝

禍害なるかな、盲目なる手引よ、汝らは蝮を渡し出して駱駝を呑むなり。(マタイ傳第二十三章二十四節)

第六節 愛の人イエス

情ある  
イエス

イエスは又憐憫の情の厚い人であつた。殊に小供、病人に對しては  
深厚の憐れみを持つてゐた。

憐みのイエス

- 憫れみあるものは幸也……………マタイ傳第五章七節
- 癩病人を憫みて……………マカ傳第一章四一節
- 牧者なき羊の如きを憫み……………マカ傳第八章二節
- 憫みを好みて祭を好まず……………マタイ傳第一二章七節、同九章一三節
- 之を憫み其病るものを醫せり……………マタイ傳第一四章一四節
- 憫みてエリコの盲者を醫す……………マタイ傳第二章三四節

更に醜業婦、放蕩息子、罪人に對しても亦多大の同情を持つてゐた。

同情のイエス

- 醜業婦に對し……………ルカ傳第七章三六―四六節
- サマリヤ人の話……………ルカ傳第一章三節以下
- 放蕩息子の話……………ルカ傳第一章一節以下
- 迷羊を尋ねる話……………ルカ傳第一章三節以下
- 子供に對し……………マタイ傳第十九章一四節
- 病人に對し……………マカ傳第一章四一節
- 富者の青年……………マカ傳第一〇章二一節
- 貧民に對し……………ルカ傳第四章一八同六章二〇節
- 罪人に對し……………ルカ傳第一八章一三節

右の中でも特に注意すべき事は、イエスが富める青年に對しても同情を持つてゐた事である。今日無産階級の人々は、有産者階級の妻子眷屬に對しても、深き敵愾心を持つてゐるが、イエスは之に對しても寛容であつた。



そうかといつて、イエスは決して貧しき者を等閑視してゐるのではない。イエスは貧民の友であつた。富める者よりも、貧しき者に幸多きを説いたのはイエスである。又富者に、そのもてるものを貧者に頒ち與へよといつたのもイエスである。只だ凡てのものを破壊すれば善いとする事に左担しないだけであつた。

ラテナウは『社會改造を急ぐ爲めに、凡ての金持を亡ばさんとするは誤である。殘る處は貧民のみとなるからである。改造運動の要諦は、貧者を凡て富者にする事ではなければならない』と言つてゐるが、イエスの心持も夫れであつた。さればこそ、富者の青年に對しても同情を以て之に忠告してゐるのである。其處にイエスの人間味があ

罪人に	對して
-----	-----

更に大なる同情は、罪人に對する同情である。イエスはパリサイ人の祈よりも、罪人の祈を神は容れ給ふと言つてゐる。之は當時のユダヤ人の考へとは霄壤の差であつた。

眞の同情は此の罪人に對する同情を基礎としなければならぬ。イエスは最も人間らしき人間であつた。故に神の性質を帯びて、罪人に對するに大洋の如き同情を持つてゐた。

如何に社會改造が行はれても、其社會の定めを破る者のある時は何にもならない。ラッセルは『物質上の富の平均を得た共產主義の理想國が來ても、人よりも餘分に欲しいといふ我儘が出ないとは限らない。そうした場合、その取込主義の人に對する處分をどうするか、此の道德的罪惡に對する處分は、改造運動の最後の難問題だ』と言つてゐる。茲に於てか社會改造運動の上にも、精神運動の併行が何より必要である。私がイエスの弟子として、社會改造運動に掌る所以も亦茲に存する。眞の靈の奥底から出る罪の宥しの精神がなければ労働運動は出來ない。

イエスの宗教の特に優れた點は、明瞭に人の罪を許す處にある。人の罪を許すのは、神が我が罪を宥し給ふからである。主の祈りの『主よ我等の罪を赦し給へ』とあるの



は、之れイエスの宗教の中核でなくてはならない。

悪を脱却する工夫——それが宗教である。尤も、一概に悪を脱却するとは言つても生理的悪から脱却する工夫を主とする宗教もある。加持祈禱をなす類が之である。又心理的悪から脱却する工夫を主とする宗教もある。運勢を見、福德を授かる類が夫れである。併し之等は未だ眞の宗教とは言へない。眞の宗教は、道徳的悪から脱却する工夫、換言すれば道徳的善でありたいとし、罪を贖ふて前へ向ふ工夫、即ち贖罪の宗教を措いて他にない。

罪を詮議立てず、罪ある者を悔ひ改めしめるといふ心持が、イエスの宗教の骨子である。

謙遜なる

イエス

柔和なるイエス

斯うした贖罪の宗教を説くイエスは性頗る柔和、謙遜であつた。

柔和なる者は幸也……………マタイ傳五章五三節

謙遜なるイエス

我は謙遜なり……………マタイ傳等一章二九節

卑るものは高くせらる……………ルカ傳第一四章一一節

何ぞ我を善きと云ふや……………ルカ傳等一八章一九節

先生と呼ぶるな……………マタイ傳第二三章一〇節

眞の謙遜は、自ら、充足せる人にして始めてなし得るものである。イエスの謙遜なりしは、全くイエスが衆人よりも秀れてゐた爲めである。即ちその人に對手の人を引上げる力があればこそ、謙遜が出来るのである。親が子に對して謙遜なるは、全く親が子を仕立てんとする心持のある結果に外ならない。故に、謙遜する爲めには、先づ生命を充足せしめねばならない。

イエスは又何故に柔和であつたか、夫れはイエスの手が世界を包む處の大きな手であつて、その手が愛であつたからである。世の中で一番強いものは母の愛である。そ



して世の中で最も強く見えて、而も最も弱いものは刃である。

太陽は、九千三百万哩の遠くからシリ／＼と照る。さればこそ、巖の如く堅い氷が臘の如くに解ける。我等の堅い心も、又誤れる社會制度も、暴力では解けないが、愛の抱擁に依つて飴の如くに解けやう。

歐洲の奴隸の解放されるまでに、十一世紀の星霜を要した。批評家は之を解放させた原動力として(一)ストイツク派の四民平等の思想(二)イエスの愛の福音——の二つをあげて居るが、愛の力が奴隸の鐵鎖を熔かして了つたのである。之が眞の柔和である。

柔和な空氣は彈力があつて Compress air ribetter (氣壓槌)を通じ、克く鐵をかしめる事が出来る。『柔和なものは幸なり、彈力を持つべければなり』とでも言はうか。『柔和なる者は地を嗣ぐを得べし、彈力を持つべければなり』とでも云はうか。

イエスは又人を輕蔑しなかつた。弟子に對しては、如何なる人と雖も輕視するなと

小兒を  
尊ぶ

教へてゐる。(ルカ傳十八章九節)殊に小兒に對しては、イエスは大なる尊敬を拂つてゐた。

小さき者を侮るな

汝ら慎みて此の小き者の一人をも侮るな、彼らの御使たちは天にありて天にいます我が父の御顔を常に見るなり。(マタイ傳第十八章十節)

ローマ時代には、嬰兒は人爲的淘汰をして捨てたものである。又廣東地方でも、約五十年前までは、子を陶器の塔の中へ捨てたものである。印度にも子を虐待する風がある。その陋習を打破し、子を尊敬し始めたのはイエスの現はれてから後の事であつた。(拙著「イエスと人類愛の内容」参照)

イエスは何故に子を尊敬したか。子供は成長するからである。未來に於て我等よりも更に進歩するからである。教育の原理、秘訣は茲になければならない。従來の教育の目的は、師の地位まで子弟を引上る事であつた。(完全主義とでも云は



うか)。然るに今日の教育は然らずして、師よりも更に上に進める事が目標とならねばならない。進化主義とでも云ふべきであらう。要は子供を愛するといふのでなく、子供を尊敬する事でなければならぬ。

二十世紀は子供の世紀だと言はれる。活きくとした、常に筋肉が躍動し、全生のもれ上る、成長しつゝある子供を尊敬せずして、他に尊敬すべきものがあらうか。イエスの教は大人中心の文明から、子供中心の文明に推移する事を教へる。

愛の人

イエス

イエスは何人をも憎まなかつた。憎むな(マタイ傳五章四十四節) たい我名の爲めに憎まるべし(ルカ傳十三章十三節)と説いてゐる。

イエスは愛の人であつた。イエスは人を愛した。(ヨハネ傳十三章一節、二十一章十七節) 殊に彼には一人の最愛の弟子があつた。(ヨハネ傳十三章三十三節、十八章十六節、十九章廿六節、廿章二節、廿一節二十節) 多分夫れはヨハネだらうと言はれてゐる。

又イエスはラザロを愛した(ヨハネ傳第十一章三十六節)。その他、母を愛し(ヨハネ傳十九章

二十六節) 敵を愛し(ルカ傳二十三章三十四節) 罪人を愛し(マタイ傳九章十三節) 又エルサレムを愛した。(ルカ傳第一三章二十節) イエスは斯くの如き愛の持主であつた。併し誤解してはならない。イエスの愛は、決して女性的の愛ではなかつたといふ事を。

イエスの教は愛である。故に悪人をも宥した。併しイエスは前に述べた如く、頗る嚴肅な人であつた。だから悪に對しては、飽くまで之を糺弾する正義の觀念を持つてゐた。

イエスは女に對しても純潔な心を持つてゐた。女を見て心を動かすは、既に姦したるなりとさへ言つた。こうした純潔な心の持主だつたから、多くの女の友人を持つてゐた。

女の友

この後イエス教を宣へ、神の國の福音を傳へつゝ、町々村々を廻り給ひしに十二弟子も伴ふ。また前に悪しき靈を逐ひ出され、病を醫されなどせし女たち、即ち七つの悪鬼のいでしマガダラと呼ばれるマ



リヤ、ヘロデの家司クレーザの妻ヨハンナ及びスザンナ此の他にも多くの女、ともなひゐて其の財産をも  
て彼らに事へたり。(ルカ傳八章一節以下)

殊に面白い事は、之等のイエスについてゐた女が多く人妻であつた事である。  
又イエスは屢マリヤの家を訪れた。之を以て或人はイエスがマリヤと戀愛關係があ  
つた如く傳へてゐる。某氏は「戀愛の福音」と題して此邊の消息を記してゐるが、夫  
れらしい事は聖書の何處にもない。又考へられもしない。

イエスは眞剣な人であつた。十字架の苦惱が餘りに近かつた爲め、彼は母や弟を顧  
る暇さへなかつた。戀愛關係の成立する如き事は思ひも寄らない。併し假にイエスが  
戀をしたとしても、夫れは決してイエスを汚すものではない。——イエスの宗教は神  
と人との結婚を重要視するものだからである。併し私は信づる。イエスと多くの女と  
の友情は、極めて純潔なものであつたと。そうでなければ多くの人妻との美しき交友  
はあり得ない。

### 第七章 イエスの美的感情と宗教的感情

然らば、イエスは美に對して如何なる感情を持つてゐたか。

エルサレムの神殿は、ギリシヤ式の建築で、工費二億圓を投じ、四  
十六年の歳月を費した(本堂だけでも三年を要した)と言はれ、大理  
石を隨所に使用し、壯麗言はん方なく、該建築中は一度も降雨がなかつたのだらうと  
さへ云はるゝ程で、ユダヤ人はヘロデの罪惡を忘れて、建築の美を讚美したほどの建  
築であつたが、イエスは弟子が同じく讚美の聲を放つに對し、



#### 一つの石も遣らじ

汝等此の一切の物を見ぬか、誠に汝らに告ぐ、此處には一つの石も崩されずして石の上に遣らじ。(マ  
タイ傳二十四章二節)

と言ひ、剩へ『此宮を毀て、我れ三日にして之を建てん』とさへ言つた。



イエスは建築の美を知らなかつたのであらうか、否、否、彼は大工であつた。建築に關しては、何人よりも優つた知識を具へてゐた。併しイエスは物質的建築よりも、生命藝術、人間殿堂の建築に多くの美感を認めてゐた。生命藝術の美しさを知つてゐた。イエスは眞の藝術を解し得る人であつた。

自	然
の	美

イエスは服装の美しさをも知つてゐた。併し生命の外の美装は、彼の目にはなかつた。イエスは美服を見なければ王の許へ行けと云つてゐる。併しそうかといつて、決してイエスは美を否定したのではなかつた。或場合は膏を塗れとさへ命じ、又自ら娼婦の捧ぐる膏を受けて居る。

イエスは決して野暮な男ではなかつた。只だ、表面的な美は、生命藝術の美に劣る事萬々なるを繰返して言つてゐた丈である。

千人の美人を擁し、金で作つた玉座の階段を備へたソロモンの榮華も、イエスより見れば、その極み野の百合の一片にも及ばなかつた。イエスは生命藝術、自然藝術

にその美的感情をひかされてゐたのである。

イエスは赤ん坊の美しさを讚美した。當時、ユダヤ人は天上には地上の子供一人一人に對し、一人一人の guardian angel が居ると考へてゐたが、イエスは赤ん坊の美しさが、人生藝術の中で最も美しいものとした。

イエスは又歌を唄つた。「彼ら讚美を歌ひて後オリブ山に出で行く」(マタイ傳二十六章三十節)とあるのでも、イエスが音樂を愛してゐた事が解る。

併し、イエスは於て我等の學ぶべき心持は、宗教的感情、神に對する感情が第一でなくてはならない。

動	的
信	仰

イエスの感情は之を二分し(一)動的宗教的感情——動的信仰と(二)靜的宗教的感情——靜的感情の二つとする事が出来る。動的信仰を持つものは、何事もなし能はずといふものはない。神と絶縁してゐる間は出來ないが、神がその人の中に在る間はなし能ふのである。夫れは、自らがなし能ふのではなくて、内在の神がな



し能ふのである。

アンドレーフの小説「信仰」には、イエスがラザロを蘇生せしめたのを真似る男の事が面白く書かれてゐるが、聖靈の力なくしては、死人を蘇生す事は愚か、何事も出来ない。イエスは常に神に對する絶対の信仰者であつた。

*inspiration  
in spirit*

靜	的
信	仰

靜的信仰を意味する。

イエスの信仰の最後の瞬間にも、イエスは毫も自己を主張せず、絶対に神に倚りかゝつた。イエスが十字架上に於て發した最後の言葉は「父よ、わが靈を御手にゆだね」といふ一語であつた。

こうした信仰を持つてゐたイエスだから、常に感謝をもつてゐた。即ちイエスは神

に神より要求するのみならず、神より得て感謝する事を忘れなかつた。

宗教を神より奪ふ事と解してはならない。神は先づ拜むべきものである。「父よ、御名をあげめさせ給へ」といふのが夫れである。拜むといふ事は内在の神を、在りの儘に拜んで通ることの生命藝術である。そして此の拜むには、必ず感謝がなくてはならない。近世獨逸の廢派の中には敬虔派といふものがあつて、神を拜む心持がなければならぬ事を説いてゐる。

人	間
殿	堂

イエスは何事も神の力なくしてはなし能はず、なし得たる事は、凡て神の御力なりとして、神に感謝してゐたものである。そしてその奪ふべからざる聖靈の力に依つて、イエスは神と人とを結び付けた。その爲めに我々腐ちた人間が、秀れた人間殿堂を築く事が出来て、其處へ神が宿つた。腐肉は輕蔑すべきものであつても、神の子としての肉、神の衣としての肉は尊敬しなければならぬ。



イエスの肉は神の藝術である。生命藝術としての美、靈肉の合一、其處には秀れた宗教の完成があつた。之を透して來る力が、復活の力となり、罪の赦しとなつたのである。

イエスの肉の飽くまで清く、復活の經驗をさへ體驗した如く、我等も又そうして惡に勝ち得るやうにならねばならない。

春の雪の下に芽生える麥の如く、腐ち果てた肉の中から蘇生らねばならない。此の感情、此の生命藝術こそ、イエスの感情の最も優秀なる分子である。

イエスは、神に依つて此の美しい感情の藝術を完成した。それは詩であり、生命である。

#### 第四章 イエスの意志



我既に世に勝てり。

——ヨハネ傳十六章卅三節——

## 第四章 イエスの意志

### 第一節 イエスの行動

平	凡
な	る
生	活

イエスは、最も人間らしき人間であつた。故に彼は寝もした。喰ひもした。話もした。イエスの生活は極めて平凡であつた。

#### イエスの行動

座す……………マカ傳第四章一節(舟の中)

傳へ……………マカ傳第一章一五節、同一三章一〇節

見る……………マカ傳第一章一六節、同第五章三八節、同第六章三四節

見廻す……………マカ傳三章五節、同一〇章二三節



- 避け……………マカ傳第六章三一節
- 組々にす……………マカ傳第六章三九節
- 強制す……………マカ傳第六章四五節
- 村の外へ連れ行く……………マカ傳第七章三三節、同第八章二三節
- 質問す……………マカ傳第八章二七節、同第九章三四節、同一一章二九節
- 子供を抱き……………マカ傳第九章三六節、同一〇章一六節
- イエス饑たり……………マカ傳第四章二節、同一一章一二節
- 呪ふ……………マカ傳第一章二二節
- 歌ふ……………マタイ傳第二十六章三一節
- 鞭つ……………ヨハネ傳第二章一五節
- 祈る……………ヨハネ傳第一七章一節
- 食ふ……………マタイ傳第八章一五節
- 飲む……………マタイ傳第一章一九節
- 休む……………マカ傳第六章三一節

- 手を取り……………マカ傳第一章二八節
- 教ゆ……………マカ傳第一章二二節、同一章三八節、三九節、同一章一三節
- 召……………マカ傳第一章二〇節、同三章一三節、同六章七節、同八章一節、同一〇章四九節
- 舟に乗る……………マカ傳第五章一八節、二二節、同八章一〇節
- 手をのべ彼につけ……………マカ傳第一章四一節
- 行く……………マカ傳第五章二四節、同六章六節(周遊)
- 戒む……………マカ傳第一章四四節、同三章一二節、同五章四三節、同八章三〇節
- 断食……………マタイ傳等四章二節
- 許す……………マカ傳第五章一三節
- 聞く……………マカ傳第七章一六節
- 逃げ隠る……………マコ傳第七章二三節、ヨハネ七章一〇節、同八章五九節、同一〇章三九節
- ……………同一一章五四節、同一二章三六節

イエスは仙人<sup>せんじん</sup>ではなかつた。又師のヨハネの如き生活もしなかつた。當時<sup>たうじ</sup>パリサイ宗の人々の考へてゐたやうな、特段<sup>とくだん</sup>な生活にも反對<sup>はんたい</sup>した。その爲にイエスはパリサイ



の人達から、大酒呑、大食漢として罵詈譏謗を受けた。私達はその平凡な人間生活を送つたイエスについて特に考へたい。

特	異
なる	點

併し、斯う言つたからとて、イエスの生活が全然我等の生活と同一だといふのではない。イエスの生活に於て、特異な點を見出さうとするならば、二つの點を擧げる事が出来る。

その一は、イエスが神と交通して居た事である。即ちイエスが祈りをしてゐる場合は、全く真劔で、或時は徹夜して祈る事さへあつた。

その二は、イエスが弟子及一般の人々に對し、常に權威を持つてゐた事である、イエスは弟子に對して、絶えず命令を發して居るし、又病人を癒す場合にも言葉短く『女よ起きよ』と權威を以て命令してゐる。

イエスが他に對して命令してゐる場合は頗る多いか、マカ傳丈けを見ても六箇所もある。

命す……マカ傳一章二七節、同六章八節、同八章卅節、同八章二九節、同九章九節、同一〇章四九節

イエスの言葉は、幾何學の公式の如く簡單で、全く冗言がなく、而も短刀のやうに鋭い。

或者はイエスを指して『惡魔の王』と言つた。イエスが惡鬼を追出すのは、其の惡魔の力だと言つた。それほどまでに、イエスは絶對の權威を以て他に臨んだのである。イエスは面倒な理窟は抜きにして、只だ『われに従へ』と言つたが、人々はその權威に壓せられて、之に従はねばならなかつた。斯うした心持がイエスの日常生活に看取されるのであつた。

一	種
の	力

イエスの行動及び生活は頗る平凡であつた。併し、彼自ら、心中に期する處は、決して平凡ではなかつた。イエスは心中に於て、自ら一般の人と違つた處のあるのを自覺して居たのは、隠れもない事實である。さればこそ、彼は人に對し權威ある者の如くにして接した。



イエスは、一種の力が、自分の中にある事を自覺してゐた。彼はその力に依つて、病を癒し、悪鬼を追出した。それは今日の催眠術、氣合術の如きもので、暗示作用を利用したのであらう。その證據には、イエスが病を癒すに當つて、特別なる所作をしてゐる事が聖書の中に現はれてゐる。

暗示作用

指を耳にさし入れ……………マカ傳七章二三節

唾して舌捫れり……………マカ傳七章三三節

天を仰ぎ……………マカ傳七章三四節

目に睡し……………マカ傳八章二五節

之を今日の變態心理學から見ると、一つの暗示を施して催眠術治療、氣合術治療をしたものと解釋するのだが、そうした學問の發達してゐない當時にあつては、全く不思議な方法と思へたに違ひない。

民衆はイエスを異常なる人とした。そしてイエスに觸れさへすれば、病は忽ち平癒するとの信仰に達した。(マカ傳に記載されてゐる處は、此信仰が白熱した場合の出來事である。)

人々はイエスに向つて殺倒した。イエスは當惑して逃げ出した事さへあつた。

御體に觸らんとて押迫る

イエスその弟子とともに、海邊に退き給ひしに、ガリラヤより來れる夥多しき民衆も從ふ。又ユダヤ、エルサレム、イドマヤ、ヨルダンの向の地およびツロ、シドンの邊より夥多しき民衆その爲し給へる事を聞きて、御許に來る。イエス群衆のおしなやますを逃れんとて、小舟を備へ置くことを弟子に命じ給ふ。これ多くの人を醫し給ひたれば、凡て病に苦しむるもの、御體に觸らんとて押迫る故なり。(マカ傳第三章七—十節)

その衣にだに觸らば

爰に十二年、血漏を患ひたる女あり。多くの醫者に多く苦しめられ、有てる物をことごとく費したれど、何の効なく、反つて益々悪くなりたり。イエスの事をききて群衆にまじり、後に來りて、御衣に



はる、「その衣にだに觸らば救はれん」と自ら謂へり。斯て血の泉、ただちに乾き、病のいえたるを身に覺えたり。(マカ傳第五章二十六—二十九節)

手をおき給はん事を

イエス又ツロの地方を去りて、シドンを過ぎ、デカポリスの地方を経て、ガリラヤの海に來り給ふ。人々、耳聾にして物言ふこと難き者を連れ來りて、之に手をおき給はんことを願ふ。(マカ傳七章三十一節)

觸り給はん事を

彼ら途にベツサイダに到る。人々、盲人をイエスに連れ來りて、觸り給はんことを願ふ。(マカ傳第八章廿二節)

觸り給はん事を

イエスの觸り給はん事を望みて人々幼兒らを連れ來り(マカ傳第十章十三節)

イエスは彼に縋つて來る病める者、惡鬼につかれたる者の悉くを癒した。今日の催眠心理の方面から見れば、イエスの如き異常の能力を持つ人ならば、此種の精神治療は何等問題ではない。

好箇のコン  
トラスト

イエスは當時の民衆の憧憬の中心であつた。故にエルサレムから、態々夫れを視察に來る者さへあつた。(マカ傳七章一節、マタイ傳十五章一節)そしてイエスの此の不思議な能力は、偶像破壊論者エリヤ以來だとの

世評であつた。

今日でも濱口熊嶽の如き、氣合で病を癒す人がある。併しイエスの如く、その衣の据にふれただけで、病が癒るといふものはない。又イエスの如く、平凡な生活をして、而も此の異常の能力を發揮し得たものはない。

エリヤは山奥へ行つて、暴風雨、地震、落雷の中に神と物語り、又天から火を呼出して、彼を捕縛に來た王の兵を焼殺し、壺から無限の粉を湧かしめた。

イエスは、此のエリヤ以來の異常の能力を發揮したといはれるが、エリヤの如く、ヨルダンの東、ケリテ川の片畔に引込み、天から烏にパンを投げて貰つて生活したといふやうな、仙人じみた生活は微塵もしてゐない。却つて、彼は娼婦や税吏と飲食を



共にしてゐる。面白いコントラストと言はねばならない。

要するに、イエスが特異な能力を持つてゐたに拘らず、彼自身の生活は何等特異なものでもなく、全く人間らしい人間の生活を送つた事は、最も注意すべき事ではなくてはならぬ。

### 第二節 イエスの能力

異常の
能力

イエスは、自ら、平凡な人間である事を發表してゐたが、而も一方に於いて内、生命の泉の溢れ出る事を自覺してゐた。聖書に「能力の己れより出づるを自ら知り」(ルカ傳第五章三十一節)とあるのが夫れである。イエスは、その生命の泉が流出して、克く人の病を癒し、悪鬼を追出すのだと信じてゐた。力の流出に就ては、變體心理を研究する人々が善く知る處である。

○イエスは薬のない時、その患部に手をつけて祈ると、病は忽ちにして癒えた。加之、

死人さへ蘇らした。(エリヤも死人を蘇生せしめた) 私は貧民窟にあつて、屢々病める貧して人々を祈に依つて癒した。その場合、私は頗る疲勞を感じた。それは、私が病人の病を癒さうとして祈り、意識を集中するからだと思つてゐる。

私は自然科學を尊重するが、此の人間の心理の法則を等閑に附する事は出来ないと思ふ。心理學上之を統覺といふが、イエスは統覺を持つてゐて、夫れが外に流出するのを自覺してゐた。

異状の
現る時

併し此の異状の能力は、始終不斷に發揮されるといふのでは素よりない。或る特段な、善く癒し得る力の出る時があつた。「彼の病を醫すべき主の力現れたり」(ルカ傳第五章十七節)とあるが夫れである。

基督教には、此の異状能力發揮の一方式が残つてゐて、先般、英國から來朝した一牧師ヒクソン氏の如きも之を行つた。又アイヌ傳道をやつてゐるバチエラー氏の如き、アイヌの肺病患者の頭へ手を置いて祈ると、その病は癒ると言はれ、又或時は、科學



の力で発見の出来ない水脈の存在を、地上に居て発見した。彼の指先からは、その能力が流れ出るのであつた。

今日の人は科學を過信し、此種の靈的異常能力を迷信だといつて斥けるが、之は心理學上から言つても、立派に成立するものである。只だ異常なる人格者に於て、多くあるといふ丈けである。

勿論、夫れは現はるる時と、現はれざる時があつて、信せざる者には現はれない。イエスは、福音書の各所に、信づれば此力が興へられるといふ事を言つてゐる。弟子達の中にも此力を持てゐた者があつたし、又弟子以外でも之をなし得る者があつた。イエスは、其名に依つて祈るものには、夫れを許したのである。

わが名によりて

信する者には此等の徴ともなはん、即ちわが名によりに悪鬼を逐出し、新しき言を語り蛇を握るとも毒を呑むとも害を受けず、病める者に手をつけなば癒えん。(マカ傳第十六章十七・十八節)

之に反し、信せざる場合には、全然之が現はれなかつた。イエスの故郷の人は信じなかつたから、遂に此事が現はれずして終つた。  
人々彼につまづけり

イエスこれらの譬を終へて此處を去りたまふ。己が郷にいたり會堂にて教へ給へば、人々おどろきて言ふ「この人はこの智慧と此等の能力とを何處より得しぞ。これ木匠の子にあらずや、其の母はマリヤ其兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダにあらずや、又その姉妹も皆われらと共にをるに非ずや。然るに此等のすべての事は何處より得しぞ」遂に人々かれに蹶けり。イエス彼らに言ひたまふ「預言者はおのが郷、おのが家の外にて尊ばれざる事なし」彼らの不信仰によりて、其處にては多くの能力ある業を爲し給はざりき。(マタイ傳十三章五四―五八節)

イエスの奇蹟

イエスの異常の能力は奇蹟として現はれた。  
イエスの奇蹟については、今日科學者から多くの疑ひを狭まれてゐる。例へば、イエスの海上徒歩の如き、死人の蘇生の如き夫れである。